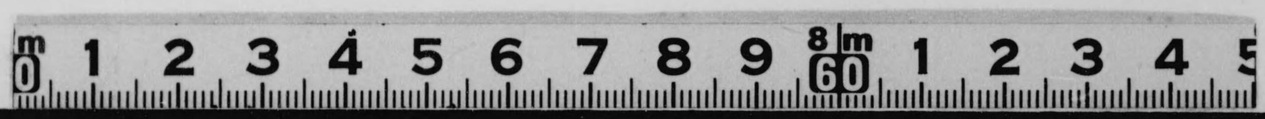
設



386
7

ト工4G-26
386-7

株式期米投機取引全

大正
7. 11. 2
内交

投機成功法

全

投機に頼つて富を求めんとする人は
先づ此の書を讀め。
眞の富は此の書を讀みたる人に由つ
て得べし。

逸名翁

一

次

一、投機心の一般性……一
一、取引所の組織……三
一、株式賣買の仕方と危險……一四
一、夢で金を拾つたと同じ事……一七
一、賣り方となつたら何うか……二一
一、百中九十九人は損……二四
一、安全確實な一方法……二八
一、會社の良否を見る標準……三〇
一、銀行で金を借りても……三一
一、綿取りを詳說すれば……三四
一、其結論は資力問題……三七
一、仲買店の魂論と斧引……三九

一、非營業的思惑賣買……四三
一、客の財產を鵜呑にする……四六
一、仲買店の信用觀察……四七
一、仲買人助言の眞相……四八
一、不德義な客と呑行爲……五一
一、皆追剝ぎに遭ふ直取引……五四
一、相場觀測者の內容……五九
一、觀測者盛衰の實例……六五
一、相場必勝秘傳に迷ふな……六九
一、金利昂低の及ぼす影響……七四
○一、奸商策略の及ぼす影響……七七
一、其他材料の及ぼす影響……七九
一、歷史に由つての……八三
○一、弱者の肉を喰ふ……八八

○一、富豪が株に對する態度……九一
一、二流以下と思惑師……九五
一、本證據金……九四
一、米相場は何うか……一〇一
一、買占めはあつても賣惜は無い……一〇五
一、豐作が續けば昂騰する……一〇八
一、期米賣買の機關と手續……一一一
一、賣買契約の解決……一一四
一、米に對する呑行爲……一一七
一、期米は斯うして生るゝ……一二〇
一、相場は斯うして動く……一二一
一、眞に公平な相場となる……一二五
一、米と日本の將來……一二九
一、政府は調節令……一三二

目次終

○一、斯界一般的智識……一四六
○一、結論……一六八
一、取引所改善意見……一六九
△坂谷男爵の意見……一七一
△天野博士の意見……一八四
○一、挿話 一……一〇〇
○一、仝上 二……一三九

株式
期米

投機取引

兜鎧閣主人述

投機心の一般向上

取引所は國家の經濟組織に缺くべからざるもので、一定の資格を有する者が特定の方法條件の下に、特殊の貨物を實物取引と、投機取引との二つを以て賣買する中心市場であつて、此處に價格の標準が起り、物價の調節を圖るの機關である、而して其の關係者は相場の變動より生じて來る差額を利得するのが目的である。

併し其れは商業道德の進歩した國民と、比較的完全なる法の定まれる國家にあつて、初めて標準となり調節となり民衆生活を圓滑にするものであらう。

我日本の如き、取引所は公設賭博場として定評があるではないか。國家が取引所に對し種々なる獨占的權能を附與してあるのは、多數商取引の圓滑に行はれ、併せて經濟界の中樞機關たる實を擧げしめん爲めに外ならぬのである、然るに當事者は自已本位の打算から這の主旨を沒却して、幾多の因襲的惡弊を矯正せず益々社會を毒しつゝあるは、寔に國家の禍根と云はねばなるまい。曩日東京取引所の重が役某、取引所繁榮策として其の附屬の空地に多數の貸家を建築する案を出した、其理由は現に兜町の取引所附近には多數のモグリ仲買がゴロついて居る、是等モ

グリ仲買は取引所の近傍に巣を喰つて居ることが看板として必要である處から競つて借りるといふにある、左なきだにモグリの跋扈に惱んで居る仲買連は、一齊に此案に反對してモグリの征伐を其筋に訴へ出でた、愈々手が這入つて羅致されたモグリ、それが悉くモグリ退治を願ひ出でた仲買の使用人輩であつて今更ながら其の處置に困つたといふ、斯うした心事の人が取引所の重役で、仲買の使用人がこの態では到底眞面目な取引が出來やう筈がないではないか。

曾て米價が拾圓臺となり、農民の生活を危くし農家は米作の不利を捨て耕作を他物に替へんとする者もあり、一方農を棄て勞働者として男も女も都會に集中するの傾向を示して來た。時の政府は大に憂悞し米價引上げに腐心し調節令を出し他方には買ひ上げを試みて昂騰を圖つて居

た。

然るに大正六七年に於ては戰亂の爲め巨大の正貨流入が一原因を爲して米價は日一日と昂騰を重ね貳拾六圓臺を割るに至つた、政府は極力之れが調節に苦心し、買占め方の巨頭等に對し警告或は戒告を與へたが決して豫期の効果を收めず其の苦心の痕の歴然として見るべきものがあつた。此の際若し誠意ある政黨があつたならば政府と協力して、假令大勢に抵抗すべからざるまでも、國民多數の憂ひを以て憂ひとすべき筈なるに、彼れ等は漫に當局を責め、而して一面には調査に名を藉りて單に申譯的行動より以上に出でなかつた、忌憚なく言はしむれば彼れ等の多數は百姓議員たるが故である、此の故に暴騰抑止の調節には寧ろ反對であるとも言ひ得らるゝ、この理由から彼等の心情は奸商等と同一歩調を執

つて國民の多數を窘窮せしめたるものなりと推定せざるを得ぬ事を國家の爲めに遺憾とする。

而も七年八月に入るや曩に貳拾六七圓を以て驚嘆せしめたるに參拾七八圓より四拾圓を拔くに至らしめ、三等白米一升五拾錢まで推し上げた。全日本國民の常食物としての米は多衆が偶々貪る特種の嗜好的食物同樣に一の贅澤品となつて了つた。茲に至つては一般の生活に大危惧を生せざる譯には行くまい。遂に富山の女一揆を初發として關西は奈良の特種部落民より峰起して神戸に大阪に最も猛烈な暴動となり、其他至る處の大小都市の動搖を來たすまでに至らしめた、この罪は果して誰れに歸すべき乎、全然爲政者に嫁すべきものでもあるまい、彼の仲買人の後に奸商あり、奸商の後に百姓議員あり、以心的三角同盟を爲して買ひ占め買

ひ煽つた反抗態度に外ならぬ。是の如くにして、公正なる標準相場を作るべき市場が殆んど民生を賭したる大賭博場と化し、一時の私利に眩惑して多衆の生存を不安に陷らしめたる同胞を有する日本國民は將來に於て大に警心せねばならぬ。

斯うした言議は、こゝには餘り痛切でないやうではあるが、國民が選出した代議士が、斯る不自然な暴騰に對して、國家民衆の味方とならずして、只一黨一派の惡向上を圖るの用具となすに至つては、言語に絶した次第で物價の調節を圖るべき機關たる取引所設定の主旨が何處にあるのである乎。

さうして一方低級な智識と微弱な資力とに蠢動しつゝある民衆は、直ちに投機を賭博的に射幸的に視る、無論其の事實が賭博的射幸的結果を

示して居るが故に然か視るのである、爲めに堅實なる勤勉節約の美風を捨て、一擧に大利を贏ち得て豪奢な生活を空想し、此の恐るべき淵に身を映す、如何に其影の華麗に隆顯に希望の光りに滿ち充ちて居るのであらうか、斯くして祖先の膏血より築き上げられた資產を失ひ、或は傾きつゝある餘財を一朝に抹消し去る、比々皆然らざるなしである。華麗隆顯なる影形は其の初めより、淡く薄く戰慄すべきものなりし事に想到した時分は、間關流離身を依する木蔭もない時である。

投機取引を斯る危險な要具となすが爲めに幾千百中一二の成金者を除くの外は盡く失敗に終るのである、實に社會風敎上默過すべからざる事ではあるまいか。

地表上の列强を敵とし、强烈なる對抗力をもつて數年に渉る戰爭を爲

して居る彼の兇惡なる獨逸の强味は果して何處にあるのであるか。

『吾々が一毛のものでも粗末にするならば、其れだけ獨逸は貧乏する』

獨逸國民は常に斯う言つて居る、そして自ら勵み子弟を勵まして居る、即ち寸を得て寸を守り、更に又寸を守ると云ふ漸進的氣分が國中に充滿して而も實行が伴つて居る、玆に自治の完成があり、玆に內容の充實がある、日本が兒童に二宮尊德を敎へる頃は獨逸の兒童は之れを實行して居る。

日本の現代に此の言行を見る事は出來ない、單に出來ないのみならず日々驕奢に流れ、日々射倖的に傾いて居る。農民は羽織袴で推し歩きたがる、商人は資を浪費して名譽職になりたがつて居る、而かも將來に待つ

男女學生は紳士淑女風に濶步して居る、勞働者は鍍金の鎖を眞物に見せやうとする、下女の指環が金色に光り、車夫の股引が毛朱繻となつて居る。其の何處に精神があり、何處に內容があるのであるが。斯うした風潮は單に中民以下に限られて居ない、上流社會は上流社會だけの大なる投機心が充溢して居る、此の階級では株式に影響する材料たる國家の新事業も國際關係も、其の起らんとする前に知り、或は多衆が數時間又は數十時間遲れて而も朧氣に知る事も、彼等は事件の突發と同時に知り、又之れに附隨して知るの便宜ある者もある、之れ等は其の事件が惡材料なれば賣り、好材料ならば買つて置く、此の準備の遺憾なく手の届いた時分始めて所謂早耳筋と言はれる小數者の知る處となつて直ちに策戰準備をする、故に如何なる階級にも投機は行はれて居る、只この階級に屬

する者だけは、如何なる場合にも目的の外るゝ事なしに巨利を占めて居る、是くの如きは投資の最善な方法と思つて居るのであらうか、寝鳥を射ると一般に不仁不義である、而して其の一面には小利を以て人を誘惑し、百の物を十で取り、千の物を百で取り、遂に相手方を牢獄の人とならしめ、甚だしきは自殺するに到らしむるの惨劇を演じさせ、利我の爲めには秋毫の道念もない、下流亦之れに倣つて道義の薄れゆくに隨つて物質慾の皮革が擴大され、勞せずして益を收め、虛に乘じて利を掴む事のみに沒頭して居る、實に現代の日本の向上發展は外界のみにして內界には次第に低下しつゝある。

『何んでも金だよ、金の爲めには多少の名譽も、友人知己をも犧牲にする事を恐れては駄目だよ、見給へ彼れ等を！』

斯う云ふ言語は屢耳にする、さうして萬一の僥倖のみを狙つて居る、之れを獨逸國民の言語と比べたら何うだ、一は欣迎すべき音律で一は戰慄すべき陰調ではないか、外敵が放つ千萬の巨彈より、內に起る此の低微なるき囁の方が何の位怖ろしいか知れない。

著者は玆に覺醒を促すと共に、多數が狙ふ投機事業が、其實際に於て如何に難事で、如何に一六的で、如何に狡獪譎詐的で而も變轉極りなく、隨つて又如何に智力を要し、如何に智力と經驗を以て當るも、大資本を以て堅實な方法に出づるの外は盡く失敗に終るものなる事を警告するものである。

取引所の組織

順序として簡單に取引所の組織を述べる事とする、取引所に二種ある。

一、株式會社組織

二、會員組織

株式會社組織とするものは即ち營利會社で、賣買契約に對し手數料を取り、其手數料にて稅金と經費を拂ひ、殘餘の利益を株主の配當、積立金又は役員使用人の給料賞與金に充つるのである。

會員組織の方は一の法人で、其取引所で賣買取引をする會員の合同体であるから其の經費は各自で分擔するので營利の目的でない。

此の區別に依つて政府が賦課する稅金にも等差がある、株式組織の方

には定期賣買の取引に對し取引稅を課した上に賣買手數料にも營業稅を課して居る、之れに反し會員組織の方は單に取引稅を課するのみである。

取引所に隨つて仲買人がある、仲買人は政府の免許を得身元保證金を納めて營業する、其の代り賣買は凡て此の手を經なければ出來ない特權を有つて居る。即ち取引所、仲買人、客（賣買せんとする人）の三者に由つて始めて取引が成立するのである。

（注意）初心者は先づ「斯界一般的智識」の一項を一讀せらるゝを便とす。

株式賣買の仕方と危險（其一）

初めての人の頭に入り易い樣に株式賣買の仕方を說明しやう、然らば各々常識に訴へて思ひ半ばに過ぐる事があらうと思ふ。

此處に五百圓を持つて株を買はうと決心する。そこで相場附けを見ると人が大騷ぎをしてる株は迚も五百圓位では買はれない、大正七年二月二十日の中限りで日本郵船株は一株が參百參拾參圓、鐘ヶ淵紡績株が貳百參拾圓もして居る、之れでは一株か二株しか買はれない、又取引所でも一二株の半端ものゝ取引は整理上繁雜で堪えられぬから、何株に關らず賣買の單位を十株としてある、故に賣買する方でも資金の多少に應じて最低の十株でも二十株でも三十株でも或は百株でも千株でも買ふか賣る

かに廻つて行くのである、最も一株でも二株でも仲買店に持つて行けば賣買は出來るが、そんな事では豫期の成金になる餘地がない、一株の狂ひが貳拾圓あつた處で貳拾圓しか儲からぬ。

然らば五百圓で何うしたら人の樣に相場が出來るか、何んでもない其れだけあれば參百參拾圓の物が十株即ち參千參百圓の物を買へるのだ、茲に既に危險が伏在して居る。

其賣買の方法は何うか。

株を買つたり賣たりする時には證據金を仲買店に入れねばならぬ、なぜかと云ふに株の賣買は、株其の物を必ず受取るのが目的でなく差金を勝ち得やうと云ふのが目的である、そこで仲買人に向つて『何株を何十株買つた』又『何株を何百株賣つた』と云ふ約束に止まるのだ、併し其の注

文を受けた仲買人は約束されたばかりで逃げられては一方の損益に對して責任を持たなければならぬから、そこで賣買の双方から株に由つて取引所で規定された證據金を取つて置かねばならぬ、そうして置けば敗けた方の證據金で勝つた方に決濟を附けて事濟みとなるのである、故に郵船株を十株買ひたいと申し込むと現時の規定で一株の本證據金は五十圓であるから、十株即ち五百圓を納めて參千參百圓の物を買つた事になる。

然るに幸ひなるかな其の參百參拾圓の株が參百五拾圓と騰つて來た、一株で貳拾圓、拾株の貳百圓儲かつた譯だが投つて置けば何うなるか明らぬ、そこで又仲買に參百五拾圓で直ぐ賣つて呉れと約束を變更せねば參千參百圓を仲買に拂つて株を引取らねばならぬではないか、元來五百

圓しかないのに其の大金は思ひも寄らない、依つて右の値で賣つて貰ふと、株の受授をせずに儲けた金の貳百圓が仲買人から受取る事になる。

今度は一番より以上に儲けてやらうと又買つた、さうすると更に參百圓儲かつた、元金と儲けたのとで千圓になつた、ヨシ今度は二十株仕懸けて遣らうと千圓を證據金にして二十株買つた、すると其の參百五拾圓のが參百八拾圓となつた、二十株では六百圓の儲けである、更に其れを足して又買ひ、又儲けては又買ひして行けば、資本は五百圓でも五萬拾萬の成金には直ぐになつて了ふ、實にうまい話しで又誰れでも其の理想を實現しやうと企圖するのである。

夢で金を拾つたと同じ事　（其二）

買へば騰り、買へば騰りするから前記の樣に五百圓から忽ち小成金になつて仕舞つたが、若し反對に買へば下り、買へば下りした時は何うなるか、其時は追證據金を取られる、參百參拾圓の株が參百圓に下つたとすると最初に入れた證據金の半分以上、詳しく言へば一株五拾圓入れてあるが、參拾圓下つたのだから其れを差引くと貳拾圓で十株の貳百圓しか殘つて居ない、仲買は取引所の規定に從ひ更に半額以上の追證據金、假りに參百圓を納める事になつた、然るに元來五百圓しかない上に借して呉れるものもなく又財産もないとなつたらもう策の施しやうがないから止むを得ず三百圓で賣るより外はあるまい、見す〳〵一株參拾圓づゝの損で、十株參百圓の損失で、仲買に參百圓と手數料とを差引かれて手に戻るのは百九拾圓餘で氣の抜けた樣な顏で考へ込むにとゞまる。

其れは餘裕のない人の事で、まだ家屋敷もあり多少の信用のある人であつたならば、ムザ〳〵參百圓を損するは如何にも殘念であると思はずには居られまい、なアに今下つても又上る、昂れば直ぐに取り返へしがつくと他から借りて追證據金を入れた、すると又下つた又工面をして追敷を入れる、斯うして追目〳〵になつて歸着する處は僅かな家産を全滅せしめた上に借金を殘すのであらう。

賣方となつたら何うか　（其三）

自分が株を持つて居ないのに賣ると云ふ事はおかしな譯だとの考へから素人で賣つて出る者は先づない、併し賣つて差支へはない、と云ふのは現株を持ち廻はるのでなく、賣つた買つたの差金を目的とするのだから

何時でも買ふ約束の通り賣る約束も出來るのである。例へば郵船株の參百參拾圓が必ず今に下るに違ひないと見込みをつけ茲に十株の賣約束を仲買店に出す、其れと同時に證據金の五百圓をつけて納める、賣るのに證據金は不要な譯だが實株を十枚持つて行くなら好いが、實は無い株だから缺損が出た時に埋めるものがない、其處で矢張り買方同樣に手付金を打つのである。斯うして置いて相場が立つ、見込み通り下つて參百拾圓になつた、そこで今度は直ぐ其れを參百拾圓で買ひ戻す、即ち買ふ人が上つた時に賣つて差金を取ると同じに、賣つて下れば下つただけの分が自分の儲けだから參百參拾圓で賣つて置いたのが參百拾圓に下れば直ぐ仲買人に賣つて貰つて一株貳拾圓、十株の貳百圓、之れを仲買から受け取るのである。

然るに反對に高くなれば高いだけの金を支拂はねばならぬ、其れを下るまで持つて居るには買ひ方が上るのを待つ樣に矢張り追敷を入れねばならぬ、そして尙ほ見込みが外れたとなれば、前記の買方同樣に裸体一貫となる譯である。

百中九十九人は損　（其四）

以上は一般に行はるゝ定期であつて、萬に一つ當る時は四五百圓で瞬間に大金持ちになるが、貳百參百もろく儲かるだけに、平常は壹圓の金もケチ〳〵使つて居たものが急に氣が大きくなり百や貳百は金臭くも思はなくなると同時に千にも萬にも仕やうとする慾が生じて中々足を洗ふものでない、又損すれば回復を計つて益々損を大きくするの大危險が伴な

つて來るのである。

そして之れを通算すると九分九厘まで失敗する實に不思議であるまいか、五人損したら五人儲かつた譯にならねばならぬのに、誰れを聞いて見ても皆失敗してる、其れには理由がある。前云ふ通り百人に一人儲けても其れは一時で足を入れてる中に綺麗に無くして了ふ、殊にお客即ち素人か半解者は必然的に損をする、黒人でも損をする、然らば其の金は何處に消えて行くのであらうかは見免す問題ではない、之れを追究して行くと、相場に關係する多くの仲買や使用人やの費用及び營業税其他の諸雜費、又取引所でも多くの使用人やの費用、更に一ヶ月何百萬圓と云ふ巨額の税金を納めねばならぬ、相場で皆に儲けられたら上記の者は何んで税を拂ひ、何んで生活するかと問題である、言ふまでもなく皆が損

した金の大部分は其の入費となつて了ふのである。

例を卑近に取れば花合せをする者が三四人集る、各々多少づゝ金の用意がある、一回毎にテラと云ふものを置く、(即ち室を貸した人の所有となるもの)斯うして二十回も三十回も繼續して行くと、テラの金は益々殖える反比例に、やつてる當事者の懐中は減つて行き、結局一人か二人が殘餘の幾分を儲けるに過ぎない、相場も理論こそ違へ愚衆のやつてる行爲から見ると賭博行爲と選む所はない。

上記の説明は誰れが講じても同樣である、之れに由つて賣買法は頭に入つたであらう。

安全確實な一方法

難科（なんぴん）賣買を必勝の秘傳の樣に云ふが、之れとて矢張り定期である上に、時と場合に由つて各人の心理狀態が變化する、此の轉機に際してどんな損失が起るかも明らない、故に矢張り危險が含まれて居る、然るに更に安全確實な方法がある、即ち富豪連が行つてる方法で、其れを詳しく說明して見やう。

其れは何んであるかと云ふに、

現物の賣り買ひである。

定期と云ふのは、例へば一月限りが百壹圓、二月限りが百貳圓、三月限りが百三圓、となつて居る、其れを實株を持たずに證據金を入れただけで「賣つた」「買つた」の約束をして上り下りの利益の差を取る者と、損を支拂ふ者とあるのであるが、現物は實際に自分が買つた株を持つのであ

る、其の目的で相場附けを見ると、某會社の參拾圓拂込みの株が五拾圓となつて居る、其配當率を見ると一割となつて居る。

然らば參拾圓の一割は年參圓だ、其れを時の相場の五拾圓で買つたとすると、之れを五十圓に割つて見ると六朱の利廻はりになる、若し其株を買はずに金を銀行に預けるとすると、銀行利子は例へば四朱にしか當らぬ、さうすれば預金をするよりも株を買つて置けば六朱の利廻りになるから此處に二朱の利益が銀行よりも多く得らるゝ、故に株を買ふ事になる、五拾圓の十株合計五百圓、此の十株を買ひ取つて持つて居ると一ケ年の後には參拾圓の配當を受ける、其の上に値が上つても下つても實物を自分の金庫に仕舞つてあるのだから、定期の賣買約束のやうに追證據金を取られる必要がない。斯うした風に實株を持つ事を現物賣買と云ひ

定期の約束ばかりとは實質を異にして居る。其の會社が破綻を來たさぬ限りは眞に安全に年々參拾圓づゝ配當が來る、事業が好況に向ふと其れより以上の配當があつて自分は株主の一人である。

併し其れは最も基礎の堅固な會社に對する利得であるが茲に最も注意を要する要件がある、其の要件は自分の暴慾を去る事と、一は會社の確實であるか否かを見る方法である。

會社の良否を見る標準

其の一は會社創立の新舊を見るにある、一樣には言へぬが新らしいより舊い方が好いとせねばならぬ、其譯は舊會社は幾多の苦境難關を切り拔けて雜多な經驗を得て依然今日の盛を爲して居るものである、能く人

は昔し者は丈夫だと云ふが、昔しの人間が丈夫なら老人許りうよ〳〵生きて居ねばならぬ、茲に一人素質の丈夫な者があつて、人は幾代も死に替つて居るのに其人は依然として活動して居るので、昔し者だから丈夫ではなく丈夫だから生き殘つて活動してる譯で、會社の新舊も此の意味に似通つて居る。

故に株を持つならば比較的舊いのが基礎の鞏固を物語つて居るので、買ふならば其れを先づ取らねばならぬ。

其の二は經營者の人物を知らねばならぬ、其の人物に由つて會社の消長を現はして來る、其の半面には人物が惡るければ會社の財產狀態も推知さるゝではないか、舊い會社は必ず一代の名家即ち資力德望の備つた者が多い。尤も新らしいからとて絕對に排斥すべきものとも限らぬ、新

會社にも人物があり且つ政府の補給を受けて居るのもあるから、之れ等は其の補給額だけは確實であるから安全と見てよろしい。

其三は自己が買はうとする株券を發行した會社の內容を調査せねばならぬ、其れを調べるには既往二三年間の決算報告書を其會社に要求すると送つて呉れる、其れに就いて貸借の對照、損益計算、利益分配等を見れば事業の消長も良否も推定する事が出來る、惡るい會社は積立金や配當が甚だ不良である、此の點は其會社の良否を測定するメートルである。

其の四は以上の諸要點を研究して愈よ確實と見込んだなら、今度は利廻はりを算定せねばならぬ、如何に基礎が堅くても利廻はりが少なければ投資の目的に反するから又茲にも大に考慮を要せねばならぬ、一体有望確實な會社の株は利廻りが薄くなつて居る、利廻はりが薄いの一點で

他の非常に割りの好い物に手を出すと、意外の失敗をする、其れは怪しい會社では種々な策略から利益はなくても配當を多くする者がある、慾に轉ろんで迂濶に多い配當に目が晦むと飛んだボロ株を掴んで大切な資金を溝に捨てると同じ運命に陷るから銀行に預けて置くより好い利廻はりなれば其れで滿足せねばなるまい。

其處で調べが附いて某株を五拾圓で十株買つた、合計五百圓を渡した、而して年二期或は二期の配當を待つて居るのであるが、其の中に相場の激變が起つて、一株に貳參拾圓も昂騰する場合があつたならば賣つて仕舞へば五百圓で買つたのが七八百圓になる、其の上に賣るまでは配當を取つて居たのだから餘程の利潤を見た譯である、反對に下つたなら何うするかと云ふに、知らぬ顏で配當だけ取つて居て昂つて來るのを何年で

も待つて居れば好い、實に簡單明瞭ではないか。

銀行で金を借りても

現物を買ふには更に一つの便利がある、矢張り五百圓の資本として玆に五拾圓拂ひ込みの株が相場は七拾貳圓となつて居る、之れを二十株買ひ取りたいと思ふ、併し此の價額は千四百四拾圓となるから餘程足りない由つて銀行から借り出す事にする、銀行でも確實なものと見たら七掛け乃至八掛けで金を出す、七掛けとすると千四百四拾圓の株に對して千八圓の金を株を抵當に貸して呉れる、そして銀行利子を假りに一錢四厘日歩と見る、千八圓に對する一年の日歩は五拾五圓貳拾錢となる。其の利子を拂つても構はない、其れは其の株が一割の配當で一年の後に

は二十株で百圓の配當が來る、故に五拾五圓貳拾錢を拂つても差引四拾四圓八拾錢の利益を得る、之れを利廻はりに見れば八分九厘となるからぼんやりとして銀行に預けて置くより有利な運用法とせねばなるまい。

鞘取りを詳說すれば

鞘取りに付ては總括的に書いたが初心には充分の理解を得まいと思ふから具体的に記るして見やう。

定期では一つの株に三通りの相場が立つ、其れは、當限、中限、先限の三つで當限は當月限りの事で、賣買の受渡しを當月末にする相場、中限は翌月、先限は翌々月になる、處で現物賣買と違つて直に金を拂ふのでなく證據金で賣買が成立つ、故に日子の多くなるだけ日歩の分丈けが

高くなる、例へば

當限が……四拾六圓

中限が……四拾八圓

先限が……五拾圓

斯う云ふ風に當より中が高く、中より先きが高いのが普通で、當と先では四圓の差が生じて居る、此の差額の事を鞘と云ふ、故に此の當限を買つて先物を賣る約束をする、即ち四圓の利益を得る、之れを鞘取りと云ふのだ。茲に五百圓の資本がある、仲買店に托して當を十株買つて先物を十株賣る約束をする、假りに一株の證據金を五圓とする、買ふ方で五拾圓、賣る方で五拾圓、合計百圓の證據金を入れる、そして此の賣買の十株づゝは自分の物となる、然るに買つた時の月末になると、當限を四

拾六圓で買つた約束で證據金を入れたのだから、十株の代四百六拾圓を拂つて株を受取る、尤も五拾圓證據金を入れてあるから、之れを差し引き四百拾圓渡せば好い、既に說いた樣に證據金だけで空賣り、空買ひをするのでなく約束通り四拾六圓の品物を確實に受取るので之より確かなる事もなく、又追證據金などを變動毎に取られる憂ひもない、そして今度は翌々月末を待つて、即ち先物を五拾圓で賣つてあるから、前の當限で受取つた十株を渡して五百圓受取る、其處で五百圓の資本で三月目に四拾圓儲る事になつた、併し仲買店に手數料を拂はねばならぬ、手數料は參百圓まで八拾五錢、五拾圓を增す毎に拾五錢づゝ增す規定だから買つた時の四百六拾圓に對し壹圓四拾五錢、賣つた時の五百圓に對しても同じで合計貳圓九拾錢と、次に取引所に對して手數料を出さねばならぬ、之

は株と時とに由つて違ふが五拾圓未滿の株なら一株貳拾壹錢で十株二圓十錢、買ひと賣とで四圓貳拾錢、二口合せて六圓拾錢、其れを利益の四拾圓から引くと實收參拾參圓九拾錢となる、之を日歩に見積ると拾壹錢參厘六毛、年利は四割一分二厘强となる、銀行に預けるより遙かに好い。

以上で鞘取りの方法は明つたであらう、要するに鞘取りは利殖方法としての一つの確實な有利なもので、買つた時に既に賣る値が明つて居て、其れで日歩が何程になるかと勘定される、由つて時の銀行日歩と比べて割のよい時に鞘取りをするのである。

其結論は資力問題

以上諸項について現物賣買と鞘取の事に就いて詳說し、而も最も安全

確實である事も了解されたであらう、然らば世間の大多數が何故に此の安全確實な方法に出でずに、危險極まる途を執つて失敗するのか、と云ふ疑問に對して、之れを一言に盡せば資力問題である。

一体多數が參百圓や五百圓內外を持て株式や商品市場に足を入るゝと云ふのは、二ヶ月も三ヶ月もかゝつて僅かに五拾圓や六拾圓の利益位では生活費にも足りない、其處で朝買つては晩に賣ると云ふ、時と時との間に起る諸事件の善惡に由つて騰落が定まる、此の間に沒頭して巨利を博さなければ、傾むく家運を興さうとか、一人前の金持ちにならうとかは出來ない、高が資本は四五百圓しかない、此の小資力で安全な利廻はりを見た處で何になるか、事實誰れが考へても何にもならぬ、腰辨をさげても月に拾五圓や貳拾圓にはなる、そんな間ぬるい事をしては居られ

ない、其處で一攫千金の方に向つて遂に無一物となるのである、故に現物とか鞘取りとかは、こんな連中には事情として向きが惡るい、矢張り大資本家の仕事となる、其れは五百圓持つて十株の賣買では參四拾圓にしかならぬが、大資本家が千株或は一萬株賣買する時には、一株貳圓の差でも實に巨額の安全な利益が得らるゝ、其處で世間の富豪は勿論、各銀行が賣買してゐる、と云ふのは銀行に遊金が出來たとする、之れを仕舞つて置けば預金者には利は拂はなければならぬが、其の支拂ふ利より以上の利廻はりに運用せねば銀行其の者の營業が立ち行かない、其處で其の遊金を以て鞘取りを遣つて儲けて行く、假し遊金がなくても定期の利廻はりの好い時は何時でも株の賣買をして居るのである、又各會社でも同じく遣つて居る、之れ等は何れも字義から云へば投資の方で、一般

人が小資で向ふ危險な方は投機であつて、玆に投資と投機との區分が立つて居るのである。

研究を此處まで推し結めて來たならば大資本家は益々富み小資本家は愈よ究する事になるので、小資を以て巨利を一擧に得る事は事實が許さない、而も自滅の因を爲すのが唯一の收穫物である、故に決して投機に手を出すものではない、只其の資力に應じて日夜營々として働けば何時かは家を興す事も身を立てる事も不可能でない事は言ふまでもない。

仲買店の魂膽と客引

株式賣買に對する客と仲買人との關係は、遊冶郎に對する娼婦の手管

より一層複雜に而も惡辣な手段がある、何れにもせよ一度此の圈內に足を踏み入るれば名譽も資產も吸ひ取られて了ふ點に於て一致する者と覺悟すれば好い、勿論其の盡くが不良ではないが、假しや善良にした處で自己の向ふ根本が投資の側でなく、投機であつたならば失ふ點に於て仲買人の善惡は餘り大なる間隔はない事になる、纔に投資の方法即ち銀行に貯金するより利廻はりの好い株に向つて賣買手續きを依託するのには信用ある仲買人を選まねばならぬ、併し其れは拾萬貳拾萬の大金を持て餘す部類であつて、四五百の金を資本とし萬一の僥倖を夢みて取引所附近をうろ〳〵する半黑人や素人とは大差がある、前者は的確に利殖し、後者は的確に損失する正反對の差である。其の何れにせよ賣買を試みやうとするには法規上仲買人の手を經由せねばならぬから何れの店かに立寄

る、と好い標鳥と店員は叮重に扱ひ、注文を聞く、別に的がなければ、今何株を買つて置けば見込があるが如何ですか、と言つたやうな言葉の変換があつて種類が確定し一定の證據金を入れる。又電話で注文すれば店員即ち客引が直ちに訪問して注文を取り、又は定まつた得意客であれば電話だけで注文を受ける、と云ふ手續きになる。そして此の仲買人中にも區別がある。

第一　客仲買人

之れは自己の思惑などの投機をせずに主として客の注文通り市場に出して賣買する堅實な部分である。

第二　手張仲買人

之れは主として自己の思惑で賣買を試みる最も危險の性質を含まれた

より一層複雜に而も惡辣な手段がある、何れにもせよ一度此の圈內に足を踏み入るれば名譽も資產も吸ひ取られて了ふ點に於て一致する者と覺悟すれば好い、勿論其の盡くが不良ではないが、假しや善良にした處で自己の向ふ根本が投資の側でなく、投機であつたならば失ふ點に於て仲買人の善惡は餘り大なる間隔はない事になる、纔に投資の方法即ち銀行に貯金するより利廻はりの好い株に向つて賣買手續きを依託するのには信用ある仲買人を選まねばならぬ、併し其れは拾萬貳拾萬の大金を持て餘す部類であつて、四五百の金を資本とし萬一の僥倖を夢みて取引所附近をうろ〳〵する半黑人や素人とは大差がある、前者は的確に利殖し、後者は的確に損失する正反對の差である。其の何れにせよ賣買を試みやうとするには法規上仲買人の手を經由せねばならぬから何れの店かに立寄

る、と好い標鳥と店員は叮重に扱ひ、注文を聞く、別に的がなければ、今何株を買つて置けば見込があるが如何ですか、と言つたやうな言葉の変換があつて種類が確定し一定の證據金を入れる。又電話で注文すれば店員即ち客引が直ちに訪問して注文を取り、又は定まつた得意客であれば電話だけで注文を受ける、と云ふ手續きになる。そして此の仲買人中にも區別がある。

第一　客仲買人

之れは自己の思惑などの投機をせずに主として客の注文通り市場に出して賣買する堅實な部分である。

第二　手張仲買人

之れは主として自己の思惑で賣買を試みる最も危險の性質を含まれた

仲買人である。

第三　呑仲買人

之れは小資本の手張仲買人に多いので客よりの注文を故意に市場にかけずに、自ら客よりの買ひを賣り、客の賣りを買つて手數料其の他の利益を得る惡德仲買の一種である、市場に出さずに自分勝手に思惑を行なつて居れば公平な相場が出來る筈がない。

第四　手先仲買人

之れは表面だけの仲買人で、營業名義人と實際の經營者とは全然別人で、資金の關係のみが手先であるのや、單に名前だけの使用で經營には無關係のものである。

第五　才取仲買人

定期又はヂキの何れを問はず、他の仲買から依頼されるか或は出資者の手先となるのも才取りの一種である。又寄附と大引けとの氣配を見て差益金を得る者、並に當中先の鞘取りを專門とする仲買人も亦才取の一種である。

以上は公許仲買人中に伏在する者であるが更に非公許仲買がある、

第六　現物仲買人

中には一般仲買人より資金も信用もある者もないではないが、全く遣り繰り算段の者もある。玆に云ふ現物仲買人とは準現物仲買に對しての假稱で取引所仲買と兼業の現物賣買を營む仲買人である。

第七　準現物仲買人

前項の現物仲買より下位に在る者で、店を取引所附近に設け現物賣買

の看板に隠れ、他の公許仲買人と約束の下に定期賣買の注文を受ける仲買人で、モグリである、併しヂキのモグリや才取のモグリのやうに惡德許り狙ふのとは違ひ、只資金がないので公許仲買人と連絡を取つて委託を取次ぎ幾分の利益を得るのである。

第八　最も惡辣な徒輩

定期取引の名の下に隠れて賭博行爲、又はヂキの取才を專業とするモグリがある、賭博行爲の輩は地方新聞に廣告し無垢の地方人から證據金の横奪をし、勘定は拂はず、其れで生活してる者、ヂキの才取は直取引相對賣買をして賭博化し、所謂テラ取りをしてる者である。之れ等が時々檢擧される側である。併し純然たる仲買人でも決して純正な遣り方はないと云つて好い、其れを一々擧ぐる事は限りある頁では不可能だ、玆に

は普通の手段を記るさう。

非營業的思惑賣買

賣買の思惑は仲買人として行はぬ者は無いと云つて好い、併し確實な營業方針を取る者は客注文を利用して短期をちよい〳〵遣る、之れを確實と云ふ位だから此の社會に眞の確實がない事は知るを得るであらう。そして不確實と云ふのは何うか、即ち手張り仲買人などになると、客なぞは眼中にない、即ち客のふところは自分のふところと心得て居て、客が出した證據金を自分が勝手に使つて損すれば客になすり附けて口錢は取り、儲かれば自分で儲けた上に口錢も取る遣り口で、此の手に懸るのは始めて相場をするか又は半黑人でも、貧弱な、そしてなけ無しの金を

持つて行くのや、金は有つても損しては最初からビク〳〵して懸るのやのマバラ客である。

具体的に云へば先廻りをするのゞ、例へば自分の手に先物注文を受けた株が比較的多い賣りである、此の時寄附の當限及び中物の相場はまだ安値ではない、然るに纏つた賣注文を受けたのは自分だけで誰れも知らぬ、此の際自分は當限や中物を目立たぬやうに百株又は二百株を賣つて置く、先物は客注文の賣りであるから相場は必ず下る、隨つて大引には當限も中物も當然安くなるのであるから、其處で注文を受けた先物を賣つて後場乃至翌日に越してまで賣り盡すまで賣つて行く、從つて相場はドン〳〵下つた處で先きに自分が賣つて置いた當中を買ひ戻すと云ふ風にする、又客が買ひであつたならば反對の手段で利益を占める、客こそ

災難である。

更にマバラ客が常に行ふ賣買は、安相場であると屹度賣りに廻はり、高値の時は必ず買つて出るのが一般の遣り方である。之れを應用して又先廻はりの思惑を遣る、例へば郵船株が參百四拾四圓を表はして居る、處へ壹圓高となつたら二千株賣れと注文があつたと假定する、此際其の相場は保合か又は餘り好氣配でない時であると、仲買人自身は參百四拾四圓或は其れ以下の値でも賣り放ち益々相場を下落させる、客の最初の目的は壹圓高で賣る考へで居つたのが段々安くなるのに驚いてまご〳〵し出す、まさか委託した仲買の仕業とも思はれないから今度は成行き賣りの委託更へをする、其處で仲買は先に自分が賣つた玉を客の賣玉と變更させ自分は其の差額をせしめ込んで口を拭いて居る。

客の財産を鵜呑みにする

よく人が呑み屋と云ふ、其れを詳しく云へば客から委託された注文の賣と買とを合せプラス、マイナスにする、例へば某株千株の買注文を受けるとすると其賣相手を取引所に求めずに、賣人のない自分の方で勝手に千株の賣人を拵へて取引所に申込む、千株買の千株賣りだから取引所の帳簿は零になつて了ふが、其の實は仲買の方には依然として千株の買が殘留されて居る、なぜ斯うするかと云ふに、此の株は近くに必ず低落するものと見込んだ時に遣る手段で、其の見込通り低落した場合、委託者から轉賣の注文が來る、其れを矢張り取引所に出さずに自分が買ひ向ふのであるから其差金は仲買人一人の懐中を肥すのである。若し見込みがはづれて昂騰となつたが最期仲買は客に取られるのであるが資金が微弱だと閉店するに至るのもある、故に斯んな手合に懸つては儲かつても損をする事となるのである。

仲買店の信用觀察

兎に角自己の財産を委託する仲買店である以上は其の信用程度に就いて調査せねばならぬ、其れは何うするかと云ふに、

一、仲買店の資産狀態並に創業の新舊。(古い程基礎が堅いと見ねばならぬ)

一、其の一切の行爲、並に違約處分、支拂勘定の遲速及び取引に對する訴訟事件の構成等。

一、經營狀態の一切並に取引銀行に對する信用程度及び客筋の種類等
一、呑行爲を爲すや否や、之れありとせば其程度の如何。
一、證據金及び代用品返還の遲延、支拂勘定の遲延。
一、受渡日に代金の前拂ひを客に請求する事の有無。

以上の事項に疑ふべき點の有る者は資產狀態の薄弱を證する者で且つ店員の變更が頻繁なるは衰微の徵である事を證する。斯うした事を素人で調査する事が面倒と思ふならで信用ある新聞社の內偵局に依賴するが好い。

仲買人助言の眞相

相場に就いての智識が單純な素人は、第一株賣買に何株を賣買すれば

好いかゞ明らぬ、空想の結果血氣にはやつて大に成金にならうなどの考へで出懸ける連中は殊に其れである、若し一己の了簡で懸るとすれば、當時グン〳〵昂騰してる株に向つて買つて出る、即ち世界の戰亂で船腹不足の爲め船株が何處までも昂騰する勢に乘じて買ふ、買へば上り、買へば上りで、貳參百圓の資本で貳參千圓は直ぐに儲かる、夢中になつて玉數を殖して行く、斯うした機會は素人成金の蛆のやうに出來る時で他人に聞くまでもないが、此の結果は突如として惡材料が勃發して、爲めに之れまで儲けた金に足し前をして投り出すやうな目に遭ふて殆んど夢に金を拾つたと同じ結果となるのである、最近大正六年の暴落當時が皆之れである。併し平調の時や沈靜に際しては何れが何うなるか一寸明らぬとする、此の際仲買人や客引は何株を賣買すればと助言する、此の助言

が頗る複雑なものである、或る客を搾つて仕舞はふと思ふ時は有利な眞實な助言をする、客は半信半疑で其れに懸つて見る、と果してうまく的中した、今度は助言者を信じて少し多く懸る、又當つた、又多く懸る、又當つた、更に多く懸つた時には、時を見計らつた時で其の一切の客の提出した金は助言者の流用する處となつて虻蜂取らずになる。

或は火急な運轉資金を要する時は何等客の利害を顧みない、耳ならず自己の將來の信用も沒却して誘惑的助言をする、其れは證據金を自分で使ふ爲めである。兎に角彼れ等の助言は眞實が眞實にならないものである事を忘れてはならぬ、故に相場に手を出すには實に非凡な知識を要するものであるが、又幾ら投機智識に長じて居ても天變地異や社會事變の勃發事件を豫知する事が出來ぬ以上は決して相場で成功する譯には行か

ぬ、早い證據が其の中に年中沒頭して居て、殊に人の嚬鼻褌で角力を取つて居る仲買人がバタ〳〵閉店するではないか。

不德義な客と呑行爲

既に記すが如く仲買人の不德不義は言語に絶して居る、然るに客にも亦不德不義の人物が少なくない、例へば注文主が電報又は電話を以て賣るとか買ふとかの注文を發する、一刻を爭ふ事業であるから證據金を受取つて居なくても其の注文に從つて置かねば、客に對し不親切でもあり又自己の信用にも關するので其の注文を市場に出し賣買約束をする、此の時客は儲かつて居れば證據金を送つて來るが損をすると證據金を送らずに逃げて仕舞ふ、斯うなると仲買人は客の損失を自分が仕拂はねばな

らぬ、斯うした不德義が客にも少なからず行はるゝから、仲買人は場合に由つて客注文を場に出さず、自已の計算とし自已の帳場で出合を求め、出合はざる時即ち千の賣りに對し千二百の買ひならば其の二百だけ場に出して、場に拂ふ手數料を自分の餘祿とし證據金を自已思惑の無利子の金融機關とし、口錢も無論納めるので中々結構な埋め合せである。

併し其れが客の信用を疑つて其の部分だけを呑むと云ふのなら、法の問題は暫く措き稍々諒とすべき行爲ではあるが、確實な客であらうが無からうが頓着なく呑んで曰く。多くの雇人を使ひ僅かな口錢位取つて店が開けて居らるゝか若し呑む事を爲ないならば仲買人は無くなつて仕舞ふ。と公然の秘密で大概は少しく又は大々的に呑んで居る。之れが即ち棒にも三分の理で……全く三分位の理で、客の不德義は全部でない以泥

上は、仲買人の呑行爲は如何に抗弁するも大なる不德不義とせねばなるまい。

斯うなるから一面には仲買人改善と云ふ問題が起つて來る、如何に改善すべきかゞ研究問題で、東京では現時五萬圓の身元保證だから自分にはなくも利益を見込んで鳥渡した金持ちなら資本家となつて開店する事が出來る、斯く根本が微弱だから爲得らるゝだけの惡るい事をして懷中を肥す、又一朝間違へば未練も惜氣もなく閉店して仕舞ひ多くの客に對して尠なからぬ迷惑を懸けるのである、故に身元保證金を拾萬圓位にしたら宜からうとの說もある、斯うすれば無論彼の片々たる徒は絕滅する事が出來るであらうが、翻つて一般社會から考ゆると却つて如何かと思ふ。既に今日の仲買人すらも盛んに思惑をやり、株式商品共昂騰を左右

する、即ち連合買とか賣りとかを行つて大暴騰落をさせて居る、大正六七年の米價の如きも即ち實證である。之れに見ても大なる資本を持つ仲買人が規定數に現はるゝに於ては客に對する不正行爲は減ずるかも知れぬが、株又は商品に對する不自然な暴騰落は今日以上の大害を實現せしむると考へねばならぬ、從つて客筋にも思はざる大損失と大利益とが出來、益々一般の投機心を煽る事となるので即ち小の虫を殺して大の虫を助ける的の結果を見たならば害毒を益々助長するのである。併し其れが如何なるにせよ小資本の多數の客には魔の手であるから關係すれば亡びるものと覺悟すれば言ふべき問題はないのである。

皆追剝ぎに遭ふ直取引

株式に向ふ普通の勝負は直取引と定期取引との二つに出る。直（チキ）とは何うなるのか其の通則は。

△直取引相對賣買　競賣買の方法で直値を定め受け渡しを目的とせずに預け合日歩勘定を以てするもの。

△同現物賣買　實際に取引を行ふ相對賣買で受渡し時日は最も短期で直に現物を受授する取引。

之れが通則であるが我國の方法では何の方面から見ても公許の賭博たる事が事實となつて來る事を遺憾とする、何故ならば實物の受渡は形式のみで、單に差金の受渡しのみをして居る、そして其の利益と損失は二日以内に決濟する、詳しく言へば甲客が或株を最少限度の十株を時の規定に隨つて證據金を附けて買ひ注文をする、乙客も同じ手續で同株を賣

り注文をする、一株に對する證據金は七年一月の規定は郵船株が五拾圓だ、單位の十株を賣買するにしても五百圓の資金を要する、安い株の證據金でも一株四圓で十株の四拾圓となる、其處で壹貳百圓のなけ無しの金で大に儲けて遣らうと思ふ者は證據金の安い十株四拾圓位の株に向はねば豫備金が無くなる、處で其の安い株でも時の相場が假りに一株四拾圓とすれば十株で四百圓なければならぬ、郵船ならば參千圓以上を要する、之れを受取るなぞは迚も出來ない、又十株位持つた處で其の配當金で生活は出來ない、其處で空株的賣買を行ふので、一株四拾圓する乙株十株即ち四百圓の物を證據金四拾圓を納めて買つたとする、相場は刻々に變動する、買注文をした時は四拾圓であつても後場大引に至つて低落が定まる、若し昂騰して四拾五圓となつたとすると、買つた者は一株五

圓、十株の五拾圓が儲つた事になるから規定通りにすれば四百五拾圓の現株を四百圓渡して引取らねばならぬのだが、元來株が目的でなく金が目的だから仲買に向つて預けた證據金の四拾圓と儲けた五拾圓とを受取り仲買には規定の口錢とを拂つて引込む。賣つた側では五拾圓損した。證據金は四拾圓しかないのだから拾圓足して決算する。之れで双方相場をしなければ双方永世に五拾圓づゝの損益で終るのである、其の決算は二日以内にする事になつて居る、ヂキは總て斯うした遣り方であるから勝負が早い、早い代りに昨日ボロを着てた者が今日はおかいこづくめになる、小資金で巨利を博さうとする者や、不健全な思想から一擧に拾萬の財産を貳拾萬にして遣らうなぞと考ゆる者は皆此のヂキに向ふから、ヂキ取引をする者が大多數を占め、そして其の九分九厘までが失敗する

のである、何故なれば慾に限りがないから損した者は乞食同樣になるが儲けた側は尙ほより以上に儲けやうと次第〳〵に仕懸けが多くなつて行く、其の大變動を食つて物の見事に根底から轉覆さるゝ事になる、故に終局は損と確定するのである、只一厘の部に入る者は勿論幸運者であると共に足れるを知る者で、僅かな資本で壹萬圓になつた、之れだけあれば寢て居ても食はれる、先づ此の邊で足を洗ふに限ると、小さい家でも造つて納まる側であるが、之れ等は全く曉天の星のやうなものだ。

斯うした風に其未來が確然としてゐるのだから確實な定期の輸取りをしたら好からうと思ふが、定期の損益は一月を買つて三月限を賣るとすれば中に四五十日の空間がある上に二十株賣買したとして一株壹圓儲けた處で貳拾圓にしかならない、之れでは四五十日の生活は出來ない、二

三千株も持てば貳參千圓になるが資金が許さないから矢張り賭博的ヂキに手を出すので、丁度山途に迷ひ〳〵て山賊の巢窟に飛び込み全部剝ぎ取られるか命までも取られると同じになるのである。

相場觀測者の內容

相場が如何に賭博的であるにせよ、之れに由つて利を得やうとするには多少の智識がなくてはならぬ、純然たる賭博でも賽の振り方や壺の扱ひ方で一を六にも五を四にも胡魔かす事が出來る、花札を持つても打ち方で敵の手を讀む事が出來る、此の何物をも知らずに知つた者を相手として僥倖のみを期待するのは根本に於て大欲陷があるではないか。兵を期ゆるに兵法を知らず、鐵條網を發見しても單に障害物とのみ測定し電

氣の威力を知らなかつたならば進擊隊は盡く死んで了ふ、日露の戰役に實例があつた、又之の電力を知つたならば切るか掘るか破壞するかの手段に由つて突進せねばならぬ事は言ふまでもないが、其處は通つても又其の先きに何んな危險があるかも知れない、其の危險物は何物であるかまで知るにも及ばぬが、何か有る可き理由を知つたならば、之れに對する方法も豫め講じて置かねばならぬ、斯く周到に考慮を廻らして突入しても兵を損じた割合に効果は尠ない事もある。相場の如きは戰をするよりも、同じ程度か其れ以上の智力を盡さねばならぬ、其れを只慾にのみ眩惑して少數の兵力と非文明な武器とを以て陣を構ゆる、其の何處にも勝目を見出す事は出來ない、而も其れが一般多數の射倖的遣り口だから、同じ事を幾度繰り返へしても投機市場に足を向けてはならぬと云ふ事を

警告するのである。

投機を直ちに賭博視しての立場と投機者流を無智識であると、斷定するのは、其の社會からは非文明と云ふであらうが、習慣や社會道德の缺陷や法の不備から、日本現在の投機事業が、賭博然たる實例が證明してゐるから仕方がないではないか。第一自己の財產を投げ出して懸る事業を、他人の觀測を俟つなぞと云ふ事が、既に當事者自身が賭博視すると同時に無智を示して居る、其れが藝者もやれば小僧もやり又金を一時に得た者は、變動の劇しい時代に誰れでもやつて誰れでも失敗する事は日清日露兩役の時と同じ轍を踏んで、而も一般的になりかゝつて來た事は社會風敎上寒心すべき傾向である、其れだけ投機智識に對し無智で、其の虛に乘じて觀測者の隆盛を現はす結果となる。

此の觀測者に二種ある、其の一は易斷觀測で、一は經驗と智識を裝ほふ觀測者で、共に自信はもつて居るであらうが、其の裏面にも亦共に策略がある。先づ易斷の方から曝けば無論自己の獨斷ではない、大体から今日の昂低は朝の中に卦を立てゝ見ると其の卦の中に天象地門人事一切の事が書いてある、其れに由つて昂低を斷定する、又梅花心易と云ふ書の方法では筮竹を取つて勿体らしい、形式には由らない、鳥の飛ぶのを見ても、何物でも音響の數を聞いても直ちに卦を頭の中に立てる事になつて居る、易者を尋ぬると、お前さんは何用で來たね、と顔を見ると直ぐ用件を當てゝ度膽をぬく易者がある、之れも矢張り心易の方法に由つて居るので不思議でも何んでもないが特種の才智學問がなければ巧く當らない、其の他の市井片々たる賣卜者に至つては素人にも明る易學大全な

ぞを根據として金を取つて居る、相場判斷などには此種類が多い、蠅殼町附近に居て米株亡者を相手に一日平均拾圓以上は缺かさぬ、時に由ると儲けた者はお禮心で五圓や拾圓はお蔭さまでと投り込んで行く者もあるから意外の收入になる、而して策略と云ふのは、一番に來た者には賣つて置けば屹度儲かる、二番には買つて置けば屹度宜しい、五人來ても十人來ても賣と買とを當分して置く、尤も卦は立てゝ見るが其れは形式さうして置けば亡者連は其の判斷に由つて處決する、賣つた上つた損をして、あの八卦も當てにならぬ早く手仕舞ひをして損を輕くしやうと狼狽して手を引くと、後場から下り出す、しまつた少し手仕舞ひが早過ぎた、矢張追敷をして我慢して居れば好かつた、易者の言つた通りになつたと信ずる、買つた側でも亦同じ事を言つて居る、元來相場は常に上つ

たり下つたりして進む、曩頃の樣に米は天井知らずに昂つては居る際でも毎日多少の高下がある、故に易者の言に狂ひはない事になる、其處で易者は凉しい顏で儲け、何うせ相場に失敗する金なら我々を肥した方が有益だなぞと言つて居る。

又經驗智識を標榜して立つ觀測者は新聞廣告を利用し一方印刷物を配つて。時機逸す可らず巨利を得んとする者は來れ。的の文字を以て誘ふそして單に高低だけを知らすには貳圓以上五圓、理由を說明すれば貳拾圓位　觀測料を取る、一方地方の注文を受ける此の信用は何から來るかと云へば矢張り易者同樣等分法を行ひ、說明を求むる者には財界、內政、外交其の他の善惡材料を並べて高低を說くの無論黑人でなくては出來ない、併し賣買時機は指定しても次に起る時間的賣買は言はないから反對

の方面に三日も四日も相場が走り出すとモー持ち堪えて居られず投り出す事になる、然るに五日目から指定通りに變動する事となつた場合に於て、今一と息辛抱すれば好かつた、となる。玆に觀測者の卓見を信じて來る、地方の者は彼れに一任して置げば必ず勝ちを利する事が出來る單純な考へから、數百數千の金を送つて代理せしむる人も出來て來る。此の順風に乘じた觀測者の隆顯は旭日のやうな勢で、長屋住居が忽ちに大邸宅の主人公となり、そして益諸種の廣告を利用して委託金の吸集となり、日に月に大なる呑み行爲を行ひ、根の大なるに隨ひ枝條の繁茂するが如く巨樹の形を爲すのである。

觀測者盛衰の實例

其一例を示せば、明治四十二三年頃から東京府下荏原郡淺間臺に宏莊な邸宅を構へ、井上通信部の商旗を屋上高く掲げ、驕奢な生活に歡樂の夢を貪ぼつて居た、即ち井上某の經營する觀測通信部であつたが、此の商旗は大正六年に入つて其のひらめきが消えてしまつた、と同時に金光邊りを振つた主人の影も見えなくなつた、其れは多くの注文に對し其の證據金を利用して自己の思惑を爲して居ると、彼の六年の大暴落に遭つて破滅を招いたのであつた、其の結果は地方人に多數の倒產者をも出すに至つた、一老婦の如きは書信にも電報にも返信途絶に驚き上京して見ると、委託者の失踪に失神せる許りとなりて終日其の邸宅の附近を胡論ついて居たと云ふ話しもあつた。而して彼の井上某に對する挿話がある。

彼れは以前栃木縣の某小學教員であつた、常に易學に趣味をもつて、單調な田舍生活の徒然を慰むる爲めに、訪問の生徒に小箱に何物かを入れさせて易で當てゝ感興を取つたり、時には失物を判斷したりして居つた、其れが生徒家庭の評判となつて、あの先生は易がうまいさうな、と言はるゝ事となつた、偶ま一資產家が株式に見込みをつけた、無論信じはしなかつたが興味を中心として試みに騰落を判斷せしめた、偶然にも的中した、又次ぎの仕懸けにも判斷せしむると之れも亦當つて其資產家は巨利を得た、其處で未だ曾つて見た事もない百圓紙幣の束を報酬として贈られ、玆に始めて自分も投機の趣味を感じ、一面には易斷の自信を持つたので斷然職を辭して投機界の人となり、腰辨忽ち榮達の人となつたと云ふ附近の評判を聞いた。

斯うした動機で一朝の榮華を夢みる者もあれば、又客引から觀測者に變じた者もあり、或は銀行に預けるより利廻はりの好い配當のある株を持ち昂くなれば賣つて利し安くなれば買つて利潤を待つと云ふ堅實な方法から自分も利しつゝ觀測もなし、人にも利殖の途を敎へると云ふ者もある、併し此の種は大なる資金を有する者の外は、如何に方法手段進退懸け引きを說くも其の說く處は事理に適するであるかは知らぬが、言ふが如く參百圓で何年間には拾萬圓の金持ちになる、此の言明に基いて株に手を出した者で、一人の成功者を見ない事でも既にさう巧くは行かぬ事が知れるではないか。

此の意味に於て小資者が易斷觀測或は涎の垂るゝ樣な利殖法を信仰したならば、惡魔の手に掴まれたと同じ戰慄を受け取るのである。

相場必勝秘傳に迷ふな

或る著書には難秤(なんびん)賣買を以て百發の內八十は中たると推賞して居る、必勝秘訣が百發百中でなく既に二十の疑問を抱含して書いた處を見ても必勝尙ほ二割の危險ある事を裏書きしてるではないか、又或著書には難秤買賣は時と場合に依るもので此の方法許りで成功するものではない、と反駁して居る、蓋し多種多樣の事情の下に勝敗を爭ふ事業としては、其の人々の運不運に依つて必勝とも必敗ともなるであらう。

して見れば一の方法で好い經驗を得た者は其れを以て必勝秘傳とすると云ふ事に過ぎないから學問として觀過すれば宜い。

其の他一種の用意として哨兵主義を用ひよと敎へて居る。其れは斥候

隊を放つので、將來の高低が鳥渡見當がつかない時、少數の賣りか買ひかを試みる、見込通りに行けば玉を增し、反對に行つた時は損を見切つて仕舞ふ譯だ、此の方法なら外れても大負傷はない代りに儲けがあつても大した事はない、併し見込みが當つて次第に玉を殖して行く中には遂には深みに入る、其の時反動が起つて來ると矢張り損失となるから、最初の用意は賭博趣味の助長の用具で結局何んにもならぬ事に終るではないか。

又相場の事は相場に聞けと書いたのもあるが何う相場に聞くのか素人に明るものでない、假し相場の足取りや人氣や各地の狀況やあらゆる事情に見て賣買を爲せと云ふ意味であらうが其樣な複雜な事が素人に明るものではあるまい、要するに一つの何んだか面白いやうな文章に過ぎな

いので金言としては價値の無い金言だ。

又仕掛け急ぐ可らずと云ふ事も秘傳の金言だが、緩くり構えて居て、彼の時に買つて置けば好かつた、と言ふ事は常に聞く處で、其の緩急の程度が明らぬ以上は之れも矢張り面白い文章即ち空文ではあるまいか。

其の他相場に關する著書の有らん限りを集めて見ても大同小異の外に出でない、而して何れも理路整然として、讀者の投機心を誘るやうになつて居る、而して其の書を金城鐵壁として戰端を開いた者で成功した者は未だ聞いた事がない、勿論相場は負けるか勝つかの二途に出でないから其の何れにかなるには極つて居るだけに其處に大なる危險がある、屢々言ふ如く冒險的に生死を決しやうとする者は別として、利殖の爲めに相場界に足を入るゝ事は、株式なら確實な現物を引取つて何年でも持つ

て居れば其れで好いが、米穀のやうな永く持つて居られぬ物品に對して
の投機行爲は、如何なる奥傳秘法を授けらるゝも常識ある者の取る可き
道ではない。

這んな著書の指導で豫想通りに行けば一人として損をする者はなくな
る譯である、尤も千か貳千の金を持つて相場界に顔を出す者で一年と姿
を見せる者は上の部で二三ヶ月位で失敗して了ふ、貳百や參百では朝飯
前に吹き飛ばされて了ふ、斯うしたやうに後から〳〵素人が出て置いて
行くから、前記の方法で行けば好い事もあるかも知れぬが、こんな名法
を知つて居れば既に素人ではない、其れなら玄人が悉く成功するかと云
ふに之れも大概は不成功に終る、仲買なぞは斯道に明るい者とせねばな
らぬ。其れが開店したかと思ふと閉店し、芽を吹いたかと思ふと萎れて

了ふではないか、東京で取引所が始まつて以來巧く切りぬけた者は十人
を出ないと云ふではないか、況んや素人が胡論ついて見た處で何うなる
ものではなからう、假りに多少の心得があつたとしても有爲轉變の世の
中だ一寸先きは即ち暗、何んの影響を食ふかも知れない、只素人に好か
つた事は歐洲の戰亂以來六年の暴落までは上る一方で素人の買方は買つ
ては賣り買つては賣りで小成金が幾らも出來、殆んど夢中になつて了つ
た、併し結局彼の暴落で蟻中の埃まで拂ふ悲境に陷つた、只其の分に安
んじた少數の者が命脈を保つに過ぎない。

斯る暴騰落は自然の循環方則で必ず起るべき問題だ、株なら五年目位
に小動搖が起り九年十年目に大相場となる、米は三年目位に動搖があつ
て十年目位には大相場となる、生理の方則から五年目と十年目に人体に

轉化を來たすのと社會狀態の動靜とが能く似て居るのも不思議ではないか、日本で近い例に見るに、明治廿七八年戰役の前後から廿九年三十年に涉つて大相場となつた、三十七八年戰役から四十一年に大騰落があり歐洲戰亂の爲め大正三年から同六年に至る大騰落を起し、七年に入つて反動を起して來たが何れも十年目を中心として居る、何時も儲ける者は此の機會に儲け損する者も亦此の場合に失敗する、之れ等は戰役に起因しての騰落であるが、其の他如何なる事情に由つて騰落するかの一斑を記して見やう。

金利昂低の及ぼす影響

日本銀行が公定利子の步合を發表すると其の昂低は直ちに株に影響す

る。利上げの場合は資金の需要が增加するので金融は逼迫して來る、其結果資金の運轉が澁ぶり各事業の根抵が動く事になり、隨つて各會社の配當利廻りの關係から株は下落する事となる。

金利の低落は商工業界の最高況となり、生產夥多となつて賣るも買ふも利益がある事となれば銀行株預金が益々增加する、自然金利を引下げねばならぬ。又最も不景氣となつて來ると財界の大恐慌で何れも不安の念に驅られ何事にも手を出さぬ、爲めに諸事業の不振となつて資金を要しない、其處で遊金が多くなる。以上の昂低は兩極端に於て諸株の騰落となる、要するに金利が安ければ株を買つた方が利廻はりが好いので株に向ひ、高ければ銀行に預ける方が好いと云ふやうな事で株に影響するのである。こゝに樂觀的材料即ち相場昂騰の原因となる可き材料を約言

すれば。

一、一般金利の低落

二、或會社が新發展の機運に向つた時

三、日本銀行擔保品制度の擴張

四、輸出超過

五、經濟界に有利な政變と何等か好結果を呈すべき現象

六、定期取引の賣物過多の反動

七、米穀の豐作

八、有力な買方と黒人筋の買ひ煽り

之れに反して悲觀的材料即ち相場が下落する原因は。

一、金利の引締り

二、或會社の營業不振となる樣な何等かの事件に際會した時

三、日本銀行擔保品制度の緊縮

四、輸入の超過

五、銀行會社等が破綻を呈す可きやうな經濟界に不利な政變とか又は何等かの惡果の生ずべき現象

六、米穀の凶作

七、天災地變及び天候の險惡

八、定期取引買物過多の反動

九、有力な賣方と玄人筋の賣り叩き

奸商策略の及ぼす影響

前記は表面上の喜憂材料で、單に之れのみを知つて我が事成れりと云ふ譯には行かない。と云ふのは、其の蔭には貪慾飽くなき奸商も居れば、表面紳士慈善家の顏をして奸商に劣らざる慾質を發揮する金持等が居て機が熟するが否や、騰貴すべき樂觀材料を逆用して相場を下向せしめ、又暴落すべき悲觀材料を利用して人氣を腐らせる、多衆は大に狼狽して賣り放つ、此の際彼れ等は盛んに買ひ煽りて其の相場を騰貴させ最高調を見るや一擧に賣つて巨利を占める。

現に七年の如きは其の米價は飢饉の歳にも曾つてない參拾圓以上の暴騰を呈した、其の實平年より不作ではない、多少の運輸澁滯はあつたとしても如上の騰貴に價ひする價値は無い、即ち奸商金持ちの買ひ煽りである、幸に外鮮米が着荷したから幾分の調節を見るであらうと思ふと、

又其外鮮米を買ひ占めた、そして愈よ昂騰を呈した。株は百圓の物が千圓になつたとしても日本の全民衆には痛切の影響はないが、日常缺く可らざる米穀に對して此の商策を弄するに至つては實に大なる罪惡ではあるまいか、併し彼れ等は却つて興味を以て敢行して居る、又反つて泥棒に三分の理的言ひぐさと金力とを以て旺然たる態度に出でゝ恥づる處がない。

僞紳士奸商の手は常に暗黑の裡に世間の富を掻き集めやうとしてるから好材料が起つたにせよ、必しも終局を全うす可きものと限られない。

其他材料の及ぼす影響

相場に關する百般の材料は何事からでも起つて來る、一般的材料とし

ても限りなくあるが今三四を擧げやう。

△貿易の消長　は金融調節の基礎と共に輸出入の統計如何は株式の材料となつて樂觀的か悲觀的かの象徴となつて來る、なぜならば若し輸入超過が持續すれば日本の正貨は流出せねばならぬ、隨つて財界の資金が減少するから株を買ふ程の餘裕が無くなる、其處で下落する譯だから輸入超過の場合は之れを悲觀材料と云ふのである、又貿易が順潮に行つて輸出が多くなれば外國の金が入るから樂觀的材料となるのである。

△財政と政治　政府が國家の行政に必要な費用を支辨する金は皆國民が負擔する租稅と公債とが財源で、施設の良否は直ちに經濟界に大影響を及ぼして來る、殊に鹽、煙草、通行稅、織物稅のやうなものは一般細民までに直接間接に負擔を重からしめ、且つ鹽や煙草のやうに官營とな

つては益國民の負擔が重くなる。公債でも外債は一時金が入つて來るから好いやうであるが好條件を除く外は株には悲觀材料となる。內債の募集は民間の資金を吸收するのであるから直ちに金融の壓迫となつて多くは悲觀材料だ、要するに民間に遊金が無くなると株は低落する。

△政治　に於ては、新內閣の組織とか動搖とか瓦解とかは、施政方針の變更を來たすから、經濟界に大影響を與へる。一般民心に肯合した內閣ならば樂觀だが、之れに反し民心に乖離した內閣ならば別に好材料の突發を除くの外は悲觀材料だ。

此の外に特種の材料は。會社營業の盛衰。競爭と獨占。基礎の强弱、資本金の增減。企業熱と事業の種類。或る會社に對する政府の認可、保護、稅法、奬勵、買收等の政策立法。生產費並に生產物の關係等に由つ

て、株式に大影響を及ぼして來るから株に手を染める者は實に宏汎な知識を有たねばならぬ。

歴史に由つての説明

東京株式取引所は明治十一年即ち四十餘年前の設立であるが、現時と違ひ諸株式會社が少なかつたので、地金銀及び公債等の取引に過ぎなかつた、次第に經濟界が發達して、拂込五拾圓(資本貳拾萬圓)の株が明治二十五年に至つて貳百參四拾圓となつた。

翌二十六年八月に至つて增資の見越と、一は金融緩和の時代なのにも關らず、政府は六分利附公債壹千萬圓を償還したので、銀行は遊金に苦しみ日步壹錢壹貳厘に引下げた、其結果が七百貳圓と大暴騰を呈して來

た、其處で銀行の金を借りて株を買へば株の配當から銀行利子を拂つても儲かるので、市場の活躍は非常であつた。然るに忽然として惡材料が突發した、其れは。

翌廿七年朝鮮の內亂より日清兩國の出兵となり、遂に清國と戰端を開いた、斯うなると莫大な戰費を要する事となつて民間の資金を吸集されるので、其の八月十六日には百五拾五圓と云ふ低落を示したが。

戰後の廿九年六月には戰ひ勝つて償金が取れる等の樂觀から八百四拾五圓と云ふ大騰貴の新記錄を造るに至つた。次が

三十七年の一月露國と國交斷絕の爲め又忽ちにして百參拾六圓の低位に落ちた。

而して平和克復後の四十年一月には高値の絕頂七百八拾圓まで進んだ

が、例の如く次第に緊縮して四十一年五月八日は憫むべし只の九拾圓參拾錢の安値となつた。

時に桂内閣は全力を公債政策に注いだ結果、四十三年三月貳百四拾五圓八拾錢に昂騰したが、其反動安は翌年六月に百參拾壹圓臺にまで下落した、而して大隈内閣は財界の緊縮を圖つたので株式相場は眠つて了つた。

大正三年に入つて稍色めかんとするや櫻島の爆發に次ぐ「皇室の不祥事に遭遇し人氣挫折益々不振となつて居るのに、其八月西歐に大事件突發し、英蘭銀行の金利は一割に暴騰するに至つたので舊株百參圓九拾錢新株七拾五圓に暴落して了つた。

獨逸と國交斷絶するや、民心俄に革り僅かの間に參拾餘圓の昂騰とな

つた、其れは獨逸の勢力を東洋より掃蕩するの見越しと、一は戰亂の終局は一年乃至一年半と解釋する者が多かつた、さうなれば前例に徴しても昂騰は必然と云ふので衆人資力を盡して買ひ煽つた、此の買過ぎの反動と中々媾和になりさうもない形勢に、そろ〳〵怖氣がついて年末最終には、舊百拾四圓餘、新八拾八圓餘まで下向した。

四年に入つても思はしくなかつた折柄軍需品の注文の上に對支談判の有望等を氣構へて昂り始め、六月には舊百七拾貳圓六拾錢、新百四拾參圓七拾錢と云ふ高値となつた、然るに又其の反動で大暴落となつて舊が百參圓臺まで來た、此の底値から又昂り始めて。

五年二月三日には舊參百參拾四圓、新參百拾參圓參拾錢となつたが、又怖くなつて買方は大概賣りに出たので俄然百圓からの大暴落となつ

た。

六年には其れが底で親が貳百七拾壹圓强、新が百七拾八圓强までに立て直ると又媾和なぞの惡材料で八月に至つて親が百七拾圓、新が百貳拾貳圓と云ふ大暴落となつて大小成金は盡く亡滅したと言つて好い程の悲境に陷つたのである。

以上の歴史は多く國運の消長に關する大事件の發生前後の大騰落を語つて居るが、此の騰落の間に生ずる小往來は社會百般の事情に由つて神經を過敏ならしめ而も小資力者の大多數が死滅する期間である、なぜならば千や貳千甚だしきは參四百圓位の資力を以て一擧に勝ちを制せんの慾望は常に精神の均衡を缺ぎ發作的狀態で精力を消費し、大手筋が買ひ出したから何か好材料があるべしと買ひ始め、賣り出すと又直ちに我れ

先きに投げて行く、何時も人の尻馬に乘つて血眼になつて居る、殆んど何等の定見もない、假しや近き將來に來たる可き變動を察知し居るも資力足らざる爲め機の到來を待つて居る餘裕がない、故になけなしの證據金だけを損して引込む者もあれば有たけの資力を出し盡して尙ほ前途の遠き爲め持ちこたえられず資力一抔で乞食同樣になつて了ふ、中に小資力でも機敏な少數者があつて、參百圓の資金で貳參千圓を贏ち得たと假定せんに、彼れ等は尙より多く得んが爲めに儲けだけを投げ出して賣り又は買ひ足しをして其の慾求を滿さうとする、故に參百圓の時は本證據金も追證據金も僅少で濟むが、多く懸れば懸る程持續費が巨額に昇つて來る、其の結果が何時か足りなくなつて、前の乞食と同樣な姿となる、只時間の長短に過ぎない、そして當時の心理狀態はと云ふと、夜ふけに

按摩針の聲を聞いても「五買ひ六遣り」と云つたやうに聞こえる、寢れば夢に見る、酒を飲んで忘れやうとしても、芝居に行つて紛らそうとしても何うしても明日の市場が氣になつて忘れ得ない、五萬拾萬の投資家も參百か五百圓の投資者も、同じ時間に同じ資力と精力とを消耗する、腦組織の不健全な者は神經衰弱の結果發狂して能く自殺するではないか、併し一方に拾萬圓の失敗者が出來れば一方には其成功者が無くてはならぬ、其れは誰れか。

弱者の肉を喰ふ富豪

右の小資本家は買つては賣り、賣つては買ふ其の間に生ずる利鞘を儲けやうと悶き廻はるに過ぎない、其れが利鞘どころか買へば下り賣れば

上ると云ふ蹉跌が二三度續くが否や忽ち血は凍れて了が、拾萬や貳拾萬は普通の拾圓か貳拾圓紙幣を取り扱ふ氣で居る富豪の羽ばたきは殆んど大暴風の樣な勢力を以て吹き上げも吹き下ろしもする、彼れ等は證據金は無論何回の追敷でも苦慮する處がない、利鞘取りは無論の事買へば沸騰するまで賣らぬ、賣れば最も高い處を賣つて了ふ、間違へば安い時に何萬株でも正株を引取つて金庫に堅く納て置く、そして世の有象無象が血眼になつて打ち死にしあふのを冷やかに眺めて時機の到るを待ち、大變動の發生や大昂騰の機會や大暴落の悲境やを心ひそかに狙つて居て、一擧に何拾萬圓を賣つては儲け又買つては儲けてゐる、此の金が即ち大多數の破產失敗者の膏血で、奈落のドン底から恨めしい聲を擧けても今は届く事ではない。故に小資本家は小相場に財產を賭して失敗し、富豪

は大相場に冷然として巨利を博する事に歸着するのが相場株式の常套であると云つて差支へはない……。

にも關はらず都鄙の空想家が、株式一斑の研究もなく、社會事情も知らずに、瞬間成金の噂や新聞記事の相場欄で投機心を煽られ、最も注意すべき株の選擇もなく、又仲買店の内容も取調べず、更に危險なる客引の言に信じて賣買をしやうとする其の無謀と大膽には驚かざるを得ないではないか、失敗するも當然な結果で成功するのが間違である、萬に一つ素人が相場に成功して終りを全ふし得らるゝものならば、仲買業を營む者は世界の富豪の列に加はらねばならぬ、事實は之れに反して客の仆るゝ如く彼等も矢張り仆れつゝあるが、又新規な客の現はるゝ如く新規な營業者が現はれて來る、何時の世にも同じ事を繰り返へしつゝ、寄つ

てたかつて富豪の富を益々大ならしむるに過ぎない。

富豪が株に對する態度

參考の爲めに二三の者を示さう。

三菱は何うか。

彼れが株式に投資する場合は、單に利鞘を儲けやうと手を附けるのではない、或る會社に何か見込が附くが否や其の事業を經營するの目的で懸る、故に其會社の内容を精密に調査し、果して是なりと決定するや、定期で買ひ現物を引取り、又現物讓受の方法を取つて代表者を出し、最も有力な大株主となり、其營業を我が意の如く爲さねば止まぬ、而して其會社をして益健全ならしめて大に利する、此の種に屬するものは形式

は株式でも其の實は合名或は合資のやうなものになる。併し或る持株でも銀行利子以上に其の利廻りが乘つて來れば其の株は無論騰貴する、騰貴すれば必ず賣つて實株を引渡して了ふ、勿論昂騰した物は五年十年の後には必ず落下する、其の時に又買つて仕舞つて置く故に益儲けるが秋毫の不利はない。

三井は何うか。

之れも同じく代表者を出して經營の衝に當らしむるが、三菱の占有的傾向でなく、之れは共同的方針を取つて居る。そして矢張り高くなれば賣り、安い時は買ひ溜めて置く。

安田一家の如きは前二者の方針とは異なり、單に安く買ひ高く賣り會社の配當と利鞘を目的とするが如し。其の他一流の富豪も同じく、以上

の三方針に出ぬ者はなく、何れも巨利を攫んでは知らぬ顔をして居るのである。

二流以下と思惑師

二流以下の資産家も之れ亦小資力者の大敵で株にせよ米にせよ大に相場を狂はせる、其れは早耳即ち政事外交其の他何事かを早く嗅ぎ出し、人に言ひ觸れさせる事もあれば、新聞種とする事もありて機を待ち、忽然と注文を連發して市場の人氣に轉化を與へて其の間に於て攫み取らうと云ふ術策にのみ傾いて居る、手もなく火事場泥棒の型である。

思惑師に至つては二流の仕事を兼ねた黒人筋、即ち地場の相場師も此の種類で、正株を持つて居らうが無からうが其樣な事には頓着なく甲會

社の株が或事情で騰る豫測が立てば買ひ立て、下ると見れば賣りに出ると云ふ、極めて拙速に大膽に機敏に立ち廻はるもので此の手に多く引き入れらるゝ者は即ち片々たるマバラ筋、即ち小資金で一家の傾敗を恢復しやうとか、十年間鹽を嘗めて辛くも四五百圓溜めた之れを資本に株か米で一擧に成金にならうなぞとフラ〳〵と魔のさして出懸ける樣な悲哀を嘗びた連中が皆財囊を搾らるゝ時なのだ。

本證據金

本證據金は時の相場の百分の五十の範圍内で定め賣買者双方から徴收する規定で、取引所は時々變動の狀況を見込みて合議決定して發表する近時は別記の表のやうに最下でも一株四圓となつてゐる、併し十株以上

でなければ賣買は出來ない、參百や四百圓の金では四五拾圓を本證として殘餘は豫備金とせねばならぬ、猫の目の樣に變つて行く相場だから二三度反對の煽りを食つたら立どころに摺つて了はなければならぬのみならず客引や仲買に呑まれて居てはテンデ問題にはならない、自分の參百圓は血と同じ金でも、先きでは金臭くも思つては居ない、或る客引は「素人の證據金などはのしを附けて貰つたのと同じです」と告白してる。又仲買店でも表面は客扱ひにしても心の中では「此の馳け出しも、なけ無しの金を置いて行くのか」とエッキス光線以上に見透かされて居る、と云ふのは素人だけに轉賣とか買戻しとかの懸け引きが明らず只一本調子で行く上に、資力に乏しく少し下れば忽ち恐怖心が起つてうろたえ、魔胡〳〵してる中に證據金は疾くに無くなり更に損金を吐き出して震へ

て引込む者許りだ、そして其金は皆客引や仲買に呑まれて居るのだから悲慘の極ではないか、不德の罪は無論彼れにあるが、兵法を知らずに戰をする自己の無謀は決して賞なる者ではない。

委託證據金一覽表

（大正七年一月十二日調）

甲之部

國債地方債證券
額面百圓ニ付一圓
但代金百圓以上ナルトキハ金二圓

勸業債券
額面百圓ニ付三圓

同貯蓄債券
額面百圓ニ付三圓

株名	一株ニ付
日本郵船株	五十圓
同汽船株	五十圓
東洋新株	十二圓
同新株	十二圓

乙之部

株名	一株ニ付
南滿鐵道株	十圓
同皮革株	十圓
日本鋼管株	十圓
日本石油株	十圓
同三月限	八圓
同船渠株	十圓
同浦賀船渠株	六圓
石川島造船株	十圓
横濱新船株	十圓
同炭礦	八圓
新潟鐵工所	十圓
同優先株	十圓
九州炭礦株	二圓
磐城炭礦株	二圓
入山採炭株	十圓
石狩炭礦株	十圓
大東鑛業株	三圓
同京阪電氣鐵道株	三圓
東京瓦斯株	五圓
同京橋共同濱株	十圓
東京洋瓦株	十圓
東京東京株	十圓
同新建倉株	十圓
同火災信託株	十圓
東京火災銀行株	十圓
東京火災新銀行株	十圓
同新通運株	十圓
東京灣汽船株	十圓
京成電軌株	十圓
伊那電車株	十圓
同古河電氣株	十圓
名古屋電燈株	十圓
箕面有馬電鐵株	十圓
阪神電鐵株	十圓
東京都電鐵株	十圓
京阪電鐵株	十圓
同新京成電鐵株	十圓
横濱電鐵株	十圓
同武蔵野鐵道株	十圓
東京新宿鐵道株	十圓
同小田原電鐵株	十圓
播州鐵道株	十圓
富士身延鐵道株	十圓
小倉鐵道株	十圓
常總鐵道株	十圓
東武足尾鐵道株	十圓
川越鐵道株	十圓
博多灣鐵道株	十圓
同横濱新鐵道株	十圓
横濱鐵道株	十圓
成田鐵道株	十圓
同武蔵新鐵道株	十圓
東京電燈株	四圓
日本石油株	十圓
同新株	十圓
日本電氣株	十圓
同古河電力株	十圓
名古屋電燈株	十圓
横濱電燈株	十圓
九州電力株	十圓
帝國水力電氣株	十圓
東京電燈株	十圓
東京瓦斯株	十圓
日本電氣鐵道株	十圓
同新京阪電鐵株	十圓
東京電燈株	十圓
帝國水力電氣株	十圓
九州電氣鐵道株	十圓
王子製紙株	十圓
同富士紙株	十圓
東京製紙株	十圓
日本製紙株	十圓
同京阪電氣鐵道株	十圓
東京瓦斯株	十圓
東京電燈株	十圓
帝國水力電氣株	十圓
九州電氣鐵道株	十圓
同名古屋電燈株	十圓
日本電氣株	十圓
同古河電力株	十圓
富士瓦斯株	十圓
同日本製紙株	十圓
桂川電力株	十圓
猪苗代水力電株	十圓
鬼怒川水力電株	十圓
朝鮮瓦斯株	十圓
利根川水力電株	十圓
同京城電氣株	十圓
同字治電氣株	十圓
函館水力電株	十圓
同九州電氣鐵道株	十圓
横濱電燈株	十圓
同名古屋電燈株	十圓
日本電氣株	十圓
同新京阪電鐵株	十圓

株名	一株ニ付
大阪商船株	十圓
同富士紙株	十圓
鐘淵紙株	十圓
同新紙株	十圓
日清紡績株	十圓
同新紡績株	十圓
東洋紡績株	十圓
尼崎紡績株	十圓
大日本製糖株	八圓
同新製糖株	五圓
臺灣製糖株	八圓
鹽水港製糖株	十圓
同新製糖株	十圓
東洋製糖株	六圓
同新製糖株	十圓
帝國製糖株	十圓
明治製糖株	十圓
東京製糖株	十圓
同新製糖株	十圓
堂島米穀株式株	十圓
大阪商船株式株	二十圓
名古屋新株	十六圓
東京瓦斯株	十六圓
明治製糖株	十六圓
帝國製糖株	十六圓
新高製糖株	十圓
同新製糖株	十圓
東洋製糖株	十圓
同新製糖株	十圓
臺灣製糖株	十圓
同新製糖株	十圓
日本製糖株	十圓
同人造肥料株	十圓
同新肥料株	十圓
東京瓦斯株	十圓
同新京造船株	十圓
キヤノン化學新株	十圓
日本電氣學校株	十圓
日本セメント株	十圓
同三月セメント株	十圓
同皮革株	十圓
日本鋼管株	十圓
日本石油株	十圓
同新製鐵株	十圓
富士瓦斯株	十圓
同新製鐵株	十圓
東京瓦斯株	十圓
日本電氣株	十圓
同新京阪電鐵株	十圓
東京瓦斯株	十圓
東京電燈株	十圓
帝國水力電氣株	十圓
九州電氣鐵道株	十圓
同名古屋電燈株	十圓
日本電氣株	十圓
同新京阪電鐵株	十圓

東京株式取引所委託手數料表（大正五年十二月一日ヨリ改正）

◉直取引及延取引

種別	委託手數料
國債地方債證券	（額面百圓ニ付）五錢
外國國債地方債證券	（同百圓相當ニ付）六錢

株式及社債券（株式ハ一株ニ付社債ハ額面百圓ニ付）

五十圓未滿	七錢	二百圓未滿 十三錢
百圓未滿	八錢	二百五十圓未滿 十七錢
百五十圓未滿	十錢	三百圓未滿 二十二錢

以上五十圓ヲ增ス毎ニ五錢ヲ增ス

◉定期取引

種別	委託手數料
國債證券	（額面百圓ニ付）七錢
地方債及社債券	（同百圓ニ付）十錢
外國地方債證券	（同百圓相等ニ付）十五錢

同株式（一株ニ付）

十圓未滿	十二錢	七十五圓未滿 二十六錢 二百圓未滿 六十五錢
二十五圓未滿	十七錢	百圓未滿 三十五錢 二百五十圓未滿 八十錢
五十圓未滿	二十二錢	百五十圓未滿 五十錢 三百圓未滿 一圓

▽▽之れ即ち泡沫會社△△

從來日本の資産家に文明智識のある者は遺憾ながら甚だ少ない、其處で會社製造屋なる者が現はれた、其製造屋も其事業には何等の智識も經驗もないが會社を組織する事は心得て居て其れから其れと造つて行く、之れは過去の歴史ではあるが、まだ其弊風が殘つて事ある毎に新會社が出來る既に其根本を過つて居るから決して長持ちはしない、之れを泡沫會社と云ふので、株を持たうとか買はふとか思ふなら、先づ經營者の經歴や人格や資本系統を充分に調査しないと自已の投資も泡沫となるのである。

米相場は何うか

米穀取引所も株式取引所と同じに無くてはならぬものであるが、其の暗面には矢張り弊害が潜んでゐる、寧ろ株式より一層甚だしい狀態である、なぜ甚だしいかと云ふと上には限りがないが、下は小資金で賣買が出來る、ズット下つては壹圓でも貳圓でもあれば毎日の生活費は取つて來られる處もある、其れは時々檢擧される合百だ、壺皿の中を狙つて丁か半かを張る樣に、墓口の小錢を賭けて騰落の差を儲けて居る、堂々と看板を懸けた仲買にも株式と同じ樣に呑むでゐる、ひどいのは鵜呑みもする、其の昂低は無論金融の如何、社會狀態、豐凶作にも由るが、豐凶作に關らず昂騰する時がある、又群衆心理から來る事も多い、實に複雜

な關係から突飛な相場を生み出すのである、原理から言ふと米も株も一上一下極つた發足點から終局に至り又轉換の氣を現出する、相場必勝虎の卷とか云ふやうな著書も詰り原則から割り出して四周の事狀に徵して此の米は何圓までは昂らなければならぬとか、暴落するとか云ふに過ぎない、易の觀測なぞは世間一切の事情から超越して、易斷即ち種本に示す處に由つて表明するのであるから、偶然に當つた者は儲け外れた者は損するに極つて居る、之れ等は易を神聖なものとして言ふのであるが前に記いた樣に斯んな事に馴れ切つた豫言者や觀測者は高いのが半數、下るのが半數の割りで判斷を與へるのだから、双方ともに見料損をしながら安心したり心配したりするに過ぎない、螟殼町邊の怪し氣な長屋に相場易斷なぞの看板を掲げて居て別に易學を究めたでもなく、ほんの筮竹

と算木を扱ふ道を知つて、初學が用ふる易學大全の中から判斷する者でも、一ヶ月の收入が貳百圓以上もあると云ふに見ても、世の中の多衆の相場に對する智識が推知さるゝではないか、即ち相場に對して無智であるから觀測や易判斷で賣買に懸るのである、丁度チーハーを買ふ氣なのだ、世間が相場に手を出す者や相場師を信用しないのも無理はない、一種の博徒に過ぎぬのだから。之れに反し大資本と顯敏な智腦とを以て米穀賣買をしてる者が、商略上の駈け引きで買占めを行ふ、其れが爲めに細民は云ふまでもなく、社會一般が蛇蝎の如く之れを呪ふ、質屋、高利貸も金融機關の最も便利なものであるが、安く取つて流れが嚴しかつたり、督促追究峻烈を極める樣な金貸等は偏に呪ひの的となつてる如く米相場師も國家の禍ひの如く思はれて居る、其處で大手筋が沒落すると一般が報復的

の盛度で喜ぶ、吹けば飛ぶやうな相場師やマバラ筋は一とたまりもなく落城するから、呪咀の的になる間がない、併し之れ等が上げにも下げにも大影響を及ぼす道具となる、其れは前記の通り智識も定見もなく易判斷に頼る位な者だけに「大手筋が買ひ始めた昂るぞソラ買へ」で附隨するから大手が三十萬石買つた時は一方は小さいが大衆だから同格位の買つて出る、其の爲めに昂る相場は益々昂り、下る時も同じ經路で瓦落が來る、そして結局は多くの場合大手が勝つてマバラが疾に打死にをする事になるのだ、要するに大博奕と小博奕とで事を大きくし、隨つて產を失ひ身を亡ぼして始めて前非を悔ゆるに止まる、五六圓の金で生活費だけ儲けやうと考へて行く者は最も害ある遊民で時を浪費するに過ぎない、貳參百圓で懸る者も結局は同じ境地に蠢動する一員として終るのであらう。

買占めは有つても賣惜みは無い

序に記すが政府は豫て米價調節令を出した、一般人民の爲め喜ぶ可き企てゞある、併しながら一面より研究するに其企ては單に學理的で實際とは反對の結果を示して居る。

大正六年の如き風水害のあつたに關らず其の收獲は五千四百六十五萬三千五十七石であつて、平年作より百六十二萬八千七百八十石の增收である、其れに外米を輸入するから貳拾五圓臺の暴騰を見る理由がない樣である、勿論買占めにも由るであらうが通貨の膨脹に伴ふ事は言ふまでもない、此の二ッが同時に手を携へては品が有つても昂騰しなければならぬ道理である、併し此處に矛盾がある、全體には持て居つても庫入れが

少なければ矢張り品不足と同じであらう、殊に十二月から一月にかけて降雪の爲め又は船腹不足の爲め等で運輸の澁滯にも由るであらうが、決して此れ許りではない、實は農家が賣らずに居るからだ、と云へば一般農家が賣り惜しみのやうであるが、さう許り測定する事は出來ない。其理由は、農家が舊節季から春にかけて要する金額は階級に由つて異なるが大体限度が各定つて居る、例へば百圓入用とするとせんに、當時の米價が拾圓であつたならば十石賣らねば必要だけの金が得らぬが、貳拾圓の高價であつたならば五石で用が足りる　更に高ければ更に減じて宜い譯になる、元來農家は平素金の費途がない、俵でも眺めて居れば其れが何よりの慰藉となる、故に惜しむ譯でもなく只必要だけ持ち出すので安ければ澤山出し高ければ少しで宜い、此の理由から高い時には却つて品不足とな

り、是れにつけ込んで一方は買ひ占めを行ふから益々暴騰を見るに至る。

以上は平時に對するものであるが大正七年の如きは全然例外と見ねばならぬ、其れは相場師に反抗買ひの意氣飽まで強く、一令出づる毎に反撥するが常であつた、故に農家は賣らんとすれば昂るが爲め次圓の樣子を見て賣り出さんと、機を待つて居る、然るに其機の來たる毎に益々昂騰するが爲めに次第に慾望の增進となる事は止むを得ない、のみならず一畝拾五圓に賣つても高價な肥料高價な手間賃を加算して尙望外の潤益を見つゝある者が、既により以上の利潤を收め居る農村は、十年來の不景氣を一擧に挽回し財囊甚だ豐かになつて居る、其れが爲めに敢て金の必要を感じない結果、其の有する殘存米は賣るも賣らぬも少しも關する處でなく全く豫算外の物質なるを以て、如何に其れが低落するも何等損

失を見ず、又昂騰すればするに隨つて甚大なる利益となるのであるから、賣り惜しむと否との問題でなく實に感興的に持つやうになつて來た、其の爲めに市場は正米の不足より益々昂騰を續け、昂騰するほど正米は農家に潜伏すると云ふの變調を示したので、畢竟相場師の際限なき釣り上げ策が茲に到らしめたのである、斯かる現象は一般民衆の生活に動搖を來たし、一方農村民は偶然の利福に奢侈姪逸の氣に流るゝ、其の餘弊や寒心すべきである、兎に角國家觀念に乏しき奸商の巢くふ米穀市場の如きは這般の事象に鑑みて最も峻嚴な法律を以て抑制せざれば依然として賭博市場の範圍から脱出する事は出來ない。

豐作が續けば昂騰する

尙ほ注意すべき意外の現象を呈する事がある、其れは豐作が二三年も續けば、低落せねばならぬ筈が却つて昂騰するのが前例になつて居る、日本の人口五千五百廿二萬四千五百人として一ヶ年の消費高は五千七百三十一萬一千七百石内外を要する、故に人口と耕作とを比ぶれば常に不足を告げて居る、此の不足を外米に仰ぐのである、豐作が續けば外米に待たぬでも宜い譯であるが、農家に米が豐かであつたり安價であつたりすれば、何うしても餘計に食ふ事になる、即ち農家では麥や甘藷を多量に混じたのが其れを減じて米を多くする、町家に在つても同じ意味で消費する、其れが爲めに反つて大不足を生じて來る、此の際一年の凶作が現はるゝと忽ち大影響を生じて來る、さうなると反動的に節約が始まるさうして又二三年の中に自然の調節が取れて行く。

斯う云ふ鳥渡氣の附かぬ事情が轉遷し、其の間に通貨の膨脹や緊縮が纏綿して來るのだから、相場の駈け引きが容易に明る筈がない、罫線を虎の卷のやうにしてる者もあるが、こんなのもを當てにして居れば必ず憂き目を見る事がある、波動の如く上れば下るのが原則だ、併し此れが何處まで上つて何處まで下るかは總て疑問で過ぎ去つてからでなくば明らぬ、其の明らぬ中間を風の間に間に搖れて居るのが相場に關係する者の狀態だ、要するに一とたび此處に足を踏み込むと金錢以外の趣味即ち勝敗の感興に入つて行く者と單に儲けやうとする者との二大別である、故に堅實な處世術としては其のどちらも取る可き途ではない、他に確實な放資の途は幾らもある。

期米賣買の機關と手續

米に對する內面は既に記述する如く、其の複雜な事と危險な事は寧ろ株式賣買の其れより以上である事は知らるゝであらう。由つて本章では其の裏面を記して參考に供する。

期米の賣買も株式と同じく、仲買人に注文して望みの石數と値段を指定するのである。(其れと同時に仲買人自らも仕手となつて客が賣れば盛んに買ひ、客が買へば盛んに賣るやうな事をして相場を狂はせて純粹の仕手即ち客筋を泣かせ世間を泣かせて自分を肥やすのである事を忘れてはならぬ)

値段の指定は取引所の立會値に關係するが、各地の習慣に依つて立會

値に歩値(あゆみね)と單値(ひとへね)とがある、歩値とは東京のやうに一立會中に賣買取組次第で幾値でも出來るが、單値は大阪のやうに一立會に一値の賣買しか出來ないのを云ふのである。

定期米賣買石數の單位は大抵百石と規定してあつて其れ以上なら端數を除いて何千何百石の取引が出來る。

賣買取引値は一石の値で、呼び値が貳拾五圓也とか貳拾五圓六拾錢とか云へば、一石に付き其の値で取引が行はるゝ事になる。

石數を云はず十枚とか二十枚とか云ふのは習慣であつて十枚とは百石で千枚は一萬石と云ふ意味である。

注文には株式の如く

成行賣買注文

指値賣買注文

とがある、成行は將來高いと見込んだ時は幾らでも構はず其の時の相場値段で買へと注文する、又安くなると見込んだ時は賣れと注文するのである。指値と云ふのは例へば貳拾五圓七拾錢以上で賣れとか買へとかを仲買に注文するか、又は貳拾六圓臺で賣るとか買ふとか又は何圓搦みでとか或は何圓何拾錢でと斷定的に申し込むのである。地方なら電報又は電話、其の土地なら電話又は自分が出向いて注文する、仲買人は其の注文通り取引所の市場に出す（之れを出せば好いが中々出さぬ大概呑んで了ふ）丁度注文通りに賣買が出來れば其旨を委託者に通告する。委託者は證據金を仲買店に渡す、領收證が返送さるゝ事に運んで行くが、始めての注文や信用の薄い者では證據金を附けての注文でなければ問題にならぬ。

賣買契約の解決

賣買契約の解決は左の三ッの方法に由る

一、受渡し

一、轉賣或は買戻し

一、解合

受渡しは正米で受渡しするのである、轉賣或は賣戻しが不利だと認めた時か又は大手の强氣か弱氣かゞ將來の買ふとか賣るとかの方針を飽くまで强行して大勢挽回を策する場合に斷行する方法であるが、本來期米の賣買は正米受渡し其物より相場の變動に依つて利益するのが主なる目的であるから最後の目的物たる正米の受渡を決行する事になると何等か

の無理が伴ふを常とする、即ち大勢が低落の米界に在つて大石數の受渡が續行され而も受方の實力が之れに伴はない場合には買方が既に滿腹して更に買ひ向ふ餘裕がない、之に反して賣方は急所に突進して之を壓迫するから大勢軟弱の期米は正米の停滯と相待つて益大崩落を來たし、買方は遂に一旦引受けた實米の維持さへ不可能となつて投げ賣りに出ればこれに正米界の激落を實現して期米も之に伴つて更に底拔け相場を現出するのである。

而して相場は既に下げ過ぎの場合となると大勢の變轉をきざす上に、賣り方は渡米準備に疲弊しきつて居る際、若し不時の出來事でも有らうものなら、買方は大勇氣を以て殺倒して來るとなれば前者と反對に奔騰相場を現出する譯になる。

其れから「轉賣又は買戻」の事は定期取引に普通に行はれる解決方法だ、轉賣の事を賣り埋めとも云ふが其れは既に買つてある期米を賣り返すことである。買戻しは買埋めとも云ふ、之れは賣つてある米を買返へすのである。此の方法に依つて相場の變動の爲めに生じた高低の差額だけの損益を決算して解決をつけるのである、此の解決が勝者の利喰ひに依る時は相場は一時の行惱みとなるが、敗者の踏退きに由る場合には其の方向に激昂激落を來たす傾きがある。

「解合」と云ふのは賣り方でも買方でも其の一方の敗者が迚も陣地が維持しきれなくなる、此の場合に勝者に妥協を申込む、即ち内密に相互間に協定し、相方の折合ふ値段で轉賣又は買戻しを約束し其値段にて取引所に於て解決をつけるのである。而して此の解決法の相場に及ぼす影響

は一部の解合であつた時は相場は益々敗者の不利の方に進行する傾きがあるが、賣買玉數の全部か又は大多數が一時に大解合をした時は一と天井即ち上り仕舞ひか、一と底即ち下げ仕舞ひとなつて、上り始めるか又は下げ始める事に轉換するやうである。其れは決戰すべき目的が消滅した上に、相場は行く處まで行つて了つた後であるから更に一轉した上でなければ氣乘りがしないからである。

米に對する呑行爲

呑み行爲と云ふ事は株式の呑行爲と大同小異であるが米として少しく方法を書いて參考に供しやう。

呑行爲は仲買人が客の賣買注文を取引の立會に出さずに自分の懐ろに

呑んで了ふのであつて、そして仲買が連合して客の反對に立ち向ふ、即ち客潰しの策で之れで大概の者は討ち死に終る。

此の呑屋には種々ある、正式の仲買人も勿論呑むが。別に呑屋專門がある、素より各種の營業看板を出して居て盛んに呑んで居る。更に一層厚顏に何んの看板も出さず內々で營業してるのがある。

屢々檢擧さるゝ此の呑屋に、客は何故に向ふのであらうか、要するに相場に失敗し他に爲すべき道もなく米屋町をゴロついて居る者や、小遣錢で其の日の生活費を得やうと云ふ者等が多く集つて行く、之れ等が薄張りと云ふので其の敷金を薄敷と云ふのである。なぜ薄張りかと云ふと本式に仲買人の手から行けば十石以下は賣買されぬ上に敷金も何拾圓と納めねばならぬが、之れは一石が貳拾錢位で十石の賣買に貳圓しかいら

ない、極く小さい店に行くと一石でも二石でも賣買が出來る、斯うした譯から薄張り薄敷と云ふのである、そして之れに足を入れてどれだけの利益があるかと云ふに、貳圓でも四圓でも出した敷金より以上は得られない事になつて居るから、如何に利が乘つて來ても其の敷金だけに上れば勘定を附けるから貳圓敷金を入れた者は四圓返つて來るから貳圓の儲けだが其の中から口錢を引かれるから壹圓七八拾錢にしかならぬ、若し不利な相場であつた時は、其の變動と口錢とで敷金は綺麗に飛んで了ふので電車賃も無くなる、玆に至つては妻の締めて居る帶でも賣つて又壹貳圓作つて行き何が何んでも貳參圓儲けて歸らねばならぬ破目に至る、運が好ければ一日に何回も行ふのだから拾圓貳拾圓の利益もある事がある、此味をしめては其のどん底まで落ちるのが此の社會の持ち前だ。

又甚だしい呑屋になると敷金全部を懐中にして裏口から逃げて了ふのもある、併し客は自分の行爲が既に違法であるから訴ふる事も出來ず、終に泣き寝入りとならねばならぬ、何の方面から見ても決して有利でないのみならず犯罪と云ふ危險が背景を爲して居るから決して足を入れべき所ではない、又正々堂々と仲買から立ち向つて見ても呑まれたり小口落しやで客の活路は見出し兼ぬるのであるから矢張り之れも手を出すべきものではない事を忘れてはならぬ。

期米は斯うして生る丶

定期米と云ふ事は定まつた期間に賣買する米の事で、例へば一月、二月、三月と此の三ヶ月を最長期間として、一月を當限りと云ひ、二月が中

限で、三月が先限り、となる、一月の受渡米は一月の末に濟むから、一月が終れば二月が當限りとなつて現在の當限が消ゆるに從つて上つて行く、故に二三四となり、三四五となるやうに何處までも三ヶ月が續いて當が幾ら、中が何程先が幾らと賣買相場が立つて行く、斯うして生る丶定期米に對して切言すれば一六的勝負を決するのである。

勿論賽の目の動き方とは違つて各々因る處があつて賣買を仕懸けるのであるから先づ其の動き方の目標を擧げて見やう。而して

相場は斯して動く

(一)人氣(二)商略(三)年柄(四)月柄(五)天候及び不時の天災(六)內外產地の米況(七)內外市場の米況(八)金融(九)相場界の出來事(十)相場其の

物の境涯、大体は之れ等に由つて騰落が生じて來るが、此の諸項目が必ず當てにはならぬ、何故ならば作柄は非常に好いから安くなるのが當然である場合に賣つて出ると反對に昂つて行く事がある、之れは一方に奸商等の商略で幾らも買ひ占めが行はるゝからなので、即ち大正六七年のやうに貳拾圓臺から參四拾圓にも突破するに見ても明かであらう、又は人氣の强弱か天候をも實物をも無視の狀態で騰落を左右する事が多い、斯うなるが爲め當然の理由が理由とならず、見込みが外れて失敗し急に狼狽して方針を變へて更に失敗を重ぬる事となつて了ふが常態である。更に詳しくいへば、前年が富作で殘米があり、市場にも現米が充實して居て、そして本年が氣候順調であると云ふ年柄であつたならば下らなければならぬ譯なのだ、其れが思つたより高い事のあるのは何うか、其れは

毎年人口の割より生產額が少ないから段々食つて行けば消失するから新米の出來るまでには其の古米に不足を生ずる傾きがあると云ふ不安から中々下げない事になる、之れは動かせない理由であらねばならぬ、併し大正七年のやうに人爲の暴騰を抑止するが爲めに當局は外米を輸入して一升貳拾壹錢貳厘で賣り出した、之れが爲めに相場は瓦落となるべき筈であるのに大勢依然として大なる動きが現はれない、斯んな不自然な事はあるまい其れと云ふのも金融の潤澤な爲め買占めた奸商等が凝と持ちこたえて居る事と、前例に徵して日本人はよく〳〵でなければ外米を喰はぬと云ふ見越しが原因してゐると見て差支へはない。

一般原則たる月柄即ち月々の特性を云へば。

正月は農家の舊歲末に當つて居るから、米を賣つて金にするから米は

市場に多く出る、故に下がるのが普通であるが何か事情の爲めに年末から上つて居ると原則通りには行かぬ。

二月は舊の正月だから米は出ない、若し一月に下げ過ぎて居れば上げ向きになつて來る、三四月は別段な特性もないやうだ。

五月は種蒔時期だから相場師は天候許り氣にするやうになる、若し故障でもありさうになれば上げ氣味になる、殊に梅雨期を控へて居るから粗惡米は持つて居ると惡るくするから續々と賣りに出る、斯うなれば下げる筈であるが其れも年柄に由つて違ふ。

六月は梅雨期で雨の有無は苗に大關係を及ぼし七月は青田譽れと云つて發育の强弱に由つて相場に關係する。

七八月頃からは相場は上げ氣味を有して來る、其れは殘米の減少や九

月の二大厄日を控へて居るから等である、九月は大概上げ勝ちである。

十十一月は收獲期で其れが豫想の以上か以下で相場の高低を呼び起す事は云ふまでもない。

十二月は總勘定月であるから多くの場合下げの傾きを持つて居る。

斯る順序と自然とに由つて相場が順潮に高低するならば即ち

眞に公正な相場となる

のであるが人間は自己の慾望の爲めに常に商略の爲めに自然を惡用し又逆行もして心腹を肥さうと企てゝ居る、そして一面には米相場にせよ株式にせよ金錢以外に趣味の問題となつて來る者が多い、一敗地に塗れた者は容易に立つ事は出來ないが、餘裕釋然たる者に至つては實に陣

容を立て直して行く、以て勝者の地位に立つた其の時の快感は、物質は以前の損失と相殺すれば零となるにせよ精神の得意は譬ふるものがない、平易に言へば其の敗け勝ちが面白くて仕方がなくなるので遂に息の根の止まる迄は止める事は出來なくなる、斯く物質慾の上に趣味が手傳つて來るから民衆とか國家とかを顧みる遑がなくなつて來る、即ち純然たる賭博者が法の網に取り卷かれて居ながら博奕に耽ると同じである。

其處で相場の原動力は天候とか周圍の事情とかは第二義で何時でも安いから買つて置いて後に儲けやうとか、高いから今賣つて置いて儲けやうと云ふ、此の强弱人氣の兩勢力で揉み上げた處のものが高低となつて相場を作る、若し買方の軍資が豐富であつて盛んに買占めを行ふ、其結果賣物が手薄となるので相場は澱みなしに昂騰する、之れに反して賣方

も死力を盡して應戰し、賣つて〳〵賣りぬけば勝ちを制する事は言ふまでもない。斯うなつて行くのであるから、米其の物の有無よりも金其の物の强弱が相場を造つて行く事となり、甚だしく國民の生活を危くする事が屢ある、近い例は大正六七年の買占めの爲め四拾圓前後の暴騰を現はしたのが其れである、之れに見ても公正な公定相場の起らぬ事が明るではないか、そして之に伴ふものは弊害許りと云ふも不當ではない、我國の如き道德觀念に乏しい米商人の手に依つて相場を作る事は實に禍ひなるかなで寧ろ專賣にした方が好いやうに思はるゝ、其れは別問題で相場と云ふものは何の方面から觀察しても、之れに手を出す人々には危險はあるが決して安定を保つ事は出來ない、相場に熟練な者は頻りに方法手段は說くが、說く其の事は過去の成行きを現在から說明するのであつ

て將來を說明する事は出來ない、說明しても其れは一條の理論であつて天變、地異、人意の傾向、世界の出來事其の他豫測すべからざるものゝ前に立つて將來を豫定する事は出來ないではないか、勿論何事かあれば此の相場は昂騰或は低落すると云ふ事は周ねく人は知つて居る、然るに何日何時に事件があるかは明らぬから、其處に危險があり賭博的行き方となつて來るのである、故に相場に手を附けて巨利を博さうと云ふ事は絕對に不可能であると斷定するに憚らぬ。

米と日本の將來

農は士の次に在つて百姓は奴隷に均しかつたが耕鋤の事は大權威者であつた、併し其れはもう過去の歷史に過ぎない、現代は工業立國論が喧しくなつた、這般の世界の大戰は更に工業に重きを置く事になつて來た而も農家の實狀も漸次に其れに傾きつゝ進んで行く事は明瞭となつて居る、其れは時代の產物であつて農業のみでは生活の不安がある、若し大正六七年の如く米價が常に高價であつたならば農民は決して業を二三にせず一を守るであらうが、斯うした事は一つの變調に過ぎない、其の將來は昔話しとして傳へらるゝ時機に至らねばならぬ、併し諸物價の昂騰は進步に伴ふ原則であるから一般が要求する處の價額までに低落する事

は疑問である、勿論米穀市場の懸引きで騰落は決して常態を伴つて行かず豫想以上に暴落する事もあらう、けれども大觀すれば人口增率と米穀收獲の比例は取れないので、耕地整理や耕鋤方法に改良を加へても到底需給の平均を保つまでには行かない、加之農家の生活狀態は種々の理由から向上して居る。

事は餘岐に渉るが元來白米食の事でも既にさうである、頗る驕奢であつた室町時代でも士庶の食は玄米の强飯と雜穀で、僅に月卿雲客のみ「色白き尾花粥」や「白雲に似たる白粥」を食して居る位であつた、降つて德川時代の初期でも征夷大將軍たる家康すら麥飯又は玄米を食して居た事が舊記にある、兎に角元祿六年までは江戸に白米小賣店が無かつた事でも玄米食が明る、享保元年に至つては次第に口が贅澤となつて白米が非

常の勢ひで流行し始めたのは、同年に白米の小賣相場が始めて立ち問屋が二十二組出來た、如何に需要者の激發したかゞ明る、其の原因は豊作續きで米價が下落した結果白米食の勢ひを助長したのであつた、其れが次第に習慣を爲して寛保頃から米搗きを營業とする者が出來た。

斯うしたやうに時代が移れば移るほど進歩と奢侈とが平行して來る、日清役までは農家でも米は十分の二位しか用ひなかつたのが戰後其の量が殖えて來た日露役に至つて更に增加した、其の原因は兵士が米食の習慣を得たからで歸農して直に雜穀食の激變には堪えられない隨つて白米を使ふの量が殖えて來た、斯ういふ原因から米は益々不足を告げて來るが殖えて行くものは脚氣病である、食事は人の最も痛切に感ずるものだけに病根を憂へるよりも味不味を感ずる事が激甚なので如何にしても白

米食に流れて來る、一方には工業が發達するに從つて米作は減退するから米の不足は年々概して悲觀的傾向とならぬを得ぬ、此の傾向は米をして益々高からしむると同時に、日本人の常食とするには此の内地米では經濟が許さぬまでになつて行く。

斯く推理して見ると漸次に他の方法と舊習慣を打破する事に一般國民が一致して研究せねばならぬ、今日既に然りで概括して米は不足ではあるが市價の不自然な變調から有る米も形を現はさぬ事になつて居る、玆に……。

政府は調節令

を出して百方苦心し、多量の外米を輸入して其の急に應じて居る、故

に眞の不足分以外の輸入量だけの日本米は農家の倉に隱れて持越す事になるので、有つても無きが如く何等の用を爲して居ない、今後に於ても奸商等が商畧上此の奇現象が再現せぬとは斷言は出來ない、又何時か風呂敷を隱して廉賣所に救ひを乞ふの慘たる目に遭はないとは限られない、故に一般民衆は食を日本の農家にのみ信賴して安然たる譯には行かなくなつた。然らば何にを常食とするかゞ大問題だ、米食から肉食に激變するには生存に害あるのみならず日本では直ちに行へない、歸着する處は東洋人は矢張り米を食ふのである、併し轉變高下波瀾の定まりなき日本米を食ふのではない、安い外鮮米を食ふので事が足りるのである、足りると云ふ事より此の結果になる事が當然の理路であらねばならぬ、味不味は建國以來近古まで玄米を食し來たつた事を思へば一の習慣に過

ぎないので根本が生存にある以上は經濟上不適當な精白日本米が何んであるか砂礫として顧みないでも好いではないか若し一般民に此の自覺があつたならば、內地米は盡く輸出して巨利を得る事となるので國家の利益は實に巨大なものとなるのである、斯うなれば食糧に不安が薄く、一方農家は產を肥し調節頗る良好となるかも知れぬ。

其の實例は最近の調節策に見て餘りある、之れは危急に對する場合で全班を律する事は出來ない眞に始めての試みであるから巧く行つて居ないと云ふのは外米輸入に對する根本問題たる關稅を輸廢しないから外米の自然輸入を抑制する、其の爲めに內地米は自然の相場に還つて來ない政府の外米買ひつけは即ち一時的のものであるからである、勿論此の關稅の存廢は農民保護の上に關する事で關稅が無ければ輸入が多くなるか

ら內地米が暴落する、さうなると農家の生活が困難を來たす理由から起つた稅律で、這般の場合にも撤廢せぬ事は農民議員の反對と一つは其處までにせずとも相當價格になる可き理由の下に調節しやうと試みた當局の方策であつたのだが、其れは只理論に過ぎない事に止まつたのであつた、加之輸入米の分配方法が極限された爲め眞に窮境に在る者を救ひ得なかつた、其れは何時の救濟事業にも失敗を重ねて居るが役人には明らないのである、何時の救濟策を見ても東京ならば直ちに細民即ち鮫ヶ橋、萬年町、富川町と云ふ方面に許り心を配つて居る、之れ等は勿論細民には相違ないが生きて行くと云ふ上には少しも困難は感じない、彼れ等には見得が入らぬ、世間の交際がない、衣類が入らぬ、門戸の態面が入らぬ、而して仕事は如何なる賤しい事にでも憶面なく遣つて行ける、子供や老人

は其日の燃料を拾つて歩ける、夫婦は日雇に出る、稼ぎ人の無い者は各戸に食を乞つて歩く、横着な者は人の乳呑兒を損料で借りて路傍に人の憫みを乞ふ、斯く殘飯喜捨を當てにして生存する事は天下之れより太平樂はない、之れに對して事ある毎に救恤復救濟となるのであるから彼れ等は其の恩に感せずして寧ろ馴れて居る、故に事ある毎に『今にお救ひが來るよ』とは常套語となつて居る、借問す日本の救濟事業が果して徹底して居るであらふか、吾徒が絶叫せんとする處は、之れ等の細民を云ふのではない、名譽あり地位ある智的窮民の顧みられない事を憂ひとするのである、智的窮民とは何か、第一に擧ぐるは浪人者で、第二は公私の薄給從業員である、物價昂騰時代に於ては其の悲慘な生活狀態は細民又は勞働者に比すれは全く地位を轉倒して居る、加ふるに這般の如く廉賣

米を指定商又は役場學校等の最も極限された場所で賣る事が既に徹底して居ない根本である、前記浪人者と言ふも其の範圍が廣いから假りに一時の失職者としやう、其失職者なるものに餘財は無い、併し其の態面は就職當時と同じ門戸を張つて行かねばならぬ、隨つて諸商人は或る程度までは貸し賣りをする、若し甲が品を止むれば乙より借る、斯うして徐ろに收入の途を構じて居る者は如何なる都市にも少なからぬ數を有て居る、此の家庭に半額或は三分の一の安價な日用品を買ふ可く勸めたとしても何うして其れを買ひ得る餘財があるか、又第二の公私從業員も月給日までは僅に小遣錢を殘すに過ぎない、彼れ等は常に救濟事業からは除外されて而も細民より以上に多大の苦痛と戰はねばならぬ、之れに加ふるに都下數萬の苦學生或は其れに類似する者の生活、即ち最も危險性を

帶びて居る其れ等に對しては漫に檢擧の冷たい眼光は及んで居るが溫味ある救濟の餘澤は及んで居ない、故に却つて益危險性を助長する事になるのである、そして救濟の潤澤を受くる者は多くは資財を有する中流階級にのみ厚くなつて居る、或る者は奉公人を連れて廉賣米を買ひ込み、或る者は一家の子女を擧げて買込み、或る者は出入の者を使つて買込んで居る、其の他は日錢を取る階級の者の便となるまでゝ眞の救濟とはなつて居ない、要するに賣買を指定極限するが爲めに外ならぬ、之れを圓滑にするの途は多々あるも思ひ玆に至らぬ事を遺憾とせざるを得ない、事に當る人々は這般の事實に鑑みて大に將來に注意する事を要す、更に繰返へして云ふ、這般の救濟は暴動に對する一時の糊塗に過ぎないので腫物に滑藥を貼ると同じであつて少しも徹底して居ないではないか。

▽▽現ナマ主義の大主株△△

株式會社の決議は往々少數大株主の意見で左右されて居る、經營者は會社の將來を思つて配當を少なくして積立金を多くして置かうとするが內容のない大株主は配當を多くてし自分がウンと取り込む目先きの慾で强要する、斯んな大株主を持つ會社は一朝經濟界に波瀾が起ると大失態を演出して居る、故に信用調査に際しては斯んな者を有する會社には關係してはならぬ。

幕府時代の米價調節

天保四年の凶歉と同七年の大饑饉とが因を爲し現代の如く奸商國中にはびこり爾後四五年に渡つて米價を始め諸物價大暴騰を爲して居る、天保十年の新板「有難い御治世 末代ばなし」中にある米價附けを見るに文政十二年十一月は白米一升百二十四文であつて翌天保元年から同四年七月までは小相場の波狀を續けたが八月下旬に上げ始め百四十文となり翌五年正月に入つて百五十四文、五月中旬まで百八十文が天井で下げ始め翌六年一月は八十四文まで下つた、其れで一上一下であつたが翌七年の凶作を氣にして八月上旬百六十四文の上騰となり翌八年一月には百七十文を告げ二月十八日百七十六文となり、同日夕方に至り二百二十四文の高値を

吹き出し、遂に大變動となつて六月中旬から七月上旬までに三百九十六文と云ふ大暴騰を現出し餓死する者數十萬人と云ふ大慘事となつて來たそして一切の穀類が上騰して、平常値もないきらず玉一ッでさえ六十八文と云ふ暴騰、其處で市中では握り飯を賣る者が現はれたが一個十五文だ。十五文は現時の金にすれば六七錢にも當らう、故に其れさえ中々口にする事も出來ぬ者が多い、又一方にはわらび餅を拵えて賣り出した、蕨に少量の米を加へて搗いた物で中々食へた物ではないが一個二文で之れが頗る繁昌を極めたと云ふ、之れに觀ても其の慘狀が知らるゝ、其處で幕府は米錢の施行となり富豪も亦之れに習つて施行した、そして一面には勿論調節策を講じた結果漸く下げ始め八月上旬より二百五十文を臺に翌九年正月百三十文となり、十年三月下旬に至つて八十六文となり、

諸物價之れに應じて平調に復して來た。

要するに此の期間奸商の買占め賣惜しみが大原因を爲して居るので幕府も大に手古摺つたらしい、其の調節令を見るに

近來米價高値にて當春以來は追々引下げ候處土用前后不順の氣候等にて人氣に障り候や去年作方宜しく當年迚も氣候に見競べ候へば存外出來方宜しき由の處夏已來又々直段引上げ候に付引下げ方の儀其の筋の者へ精々申渡候事に候、追々新穀出來物、澤山に相成る可き儀と拂底にも可至、此上直段引上げ可申杯との見越を以て餘分の米は賣り放さずと彌增買持候樣仕成候者有之候ては心得違の事に候、銘々安堵の致渡世候冥加存ずべく、米價賣買に携り候者は勿論、百姓素人に至る迄如何にも直段引下げ候樣力の及候丈は賣買方勸辨可致候、一己の利德

に占賣又は多分の買持等致間敷候（九月十七日）

更に酒造に就いて大に注意を拂ひ一時に買立つる事を禁じ、背く者は『急度可令沙汰候』とある。併し其れでも尙ほ奸商の無遠慮な處から、

（前略）一廉人氣も引弛む筈の處兎角米穀可及拂等、素人共に至る迄見越の懸念を生じ彼此人氣を募らし候は以ての外の事（中略）素人は多分の石數買持候儀は致間敷若し心得違の者於有之は無用捨召捕急渡可及沙汰候云々

次第に峻烈となつて來た、幕府政治で『沙汰せしむ可く候』と云ふ事は輕いやうではあるが現時の警告位のものではない、もつと手嚴かつた併し慾望の爲めには奸商は素より素人までが賣らなかつたり又は買持ちをする事となつた、恰も大正七年の狀態であつた、其處で『無用捨召捕

急度可及沙汰候』となつた、之れは威し許りでなく犇々召捕つて獄に下した、之れで如何な我利連中も恐れを爲して漸次に恢復の狀を呈した、

物質に對し一痛棒を與ゆると同時に運賃に制令を下したのは舟車の運賃も暴騰するのみならず水夫、沖取人足まで賃金を貪るので隨つて諸物價が高くなる、因つて少しでも貪りがましい者があれば奉行所へ訴へ出る事にした。

斯くして天保十年は暮れ十一年の春となつたが、當時越後小千谷の相場は米四斗四升俵金十兩に付三十俵と云ふ値で石數にすると百三十二石が十兩となつた、一兩では一石三斗二升、筑前米は一石五十六匁肥後米六十三匁五分に下落した。

此の天保七年の凶作で八年の暴騰は仕方がないとして八九十の三年間

も暴騰して居た事は不可解で何故始めから峻嚴な法令を出さなかつたのであらう乎、其の裏面を觀察するに當時諸侯は皆米で年貢を取り殘米を賣つて居た、昂騰すれば諸侯の儲けとなる、斯んな利害から幕府も幾分加減したのでは無からうか、丁度現時に於ける政黨者流と農民との關係の如くに……。兎に角何時の時代にも能く似た事のあるものだと思ふ、併し鐵槌一打の痛快な遣り方は幕府政治に限るので今の樣な遣り口では多數國民は甚だ苦痛に堪えられない、併し一得一失と諦めるより外はない。

斯界一般的知識

何れの著書も投機事業の有利安全な事のみを說いてある、勿論安全な方法もあらうが其れは其の人々の智力にも由り資力にも依る、又其の人々の事情にも境遇にも由るので、其の說かるゝ方法が決して一般を成行せしむるの保證は附けられぬ、此の意味に於て一般人の取るべき利殖法、即ち小資本家の向ふ可き道は、嶮嶮巍峨たる捷徑を執らんより平坦な路を遠く廻はるの最安全なるに如くはない、併し此處に若干金が有るとする、斷然之れを棄てる氣で伸るか反るかの場合があつたとすれば、多少の豫備智識があつた方が幾分の興味がある、故に重要な事だけを擧げて參考の資に供するのである。

【い】

△煎れる　將來下る見込で賣つたのが上つて損となつたがまだ見込があるので高くなつたのを買ひ戻す事で煎れ退くとも云ふ。

△色　米俵に黃色の班點を生ずるを色と云ふ。

△今挽米又今摺米　收獲米を籾の儘で貯藏し翌年摺つて玄米としたのを云ふ。

【は】

△賣買單位　賣買する株式の最少數で定期取引にて十株を單位とする。

△倍敷　相場の變動激しい時證據金の倍額を預るべく仲買が委托人に要求する事。

△端株(はかぶ)　定期市場で主力株又は人氣株以外の物を云ふ。

△半商内　株式界で直段に五錢の端數の附いた場と定期米取引で五厘なぞの附いた時。

△早耳筋　相場に影響を及ぼす樣な出來事を人より先きに聞き出し駈引をする者。

△端境　定期米市場並に現米市場に今年の收獲米を運び出した時即ち古米と新米との境目をはざかいと云ふ。

△賣買　之れは殊にばいかいと讀む、同一仲買が賣と買とを同時に取引所に出す事又附け出しとも云ふ。

△場面　立合の人氣模樣を云ふ。

△吐く　客注文を呑んで居たものを場に上して賣買するを云ふ。

【ほ】

△本證據金　取引所は仲買人より新規賣買に對し最初に徵收するもの略して本證、本敷とも云ふ。

△本場　は午前中の立會、後場は午后。

△棒値　標準値段の俗稱。

△ボケル　相場が活氣を失ふたるを云ふ。

【と】

△ドタ　何拾何錢と端數のない値段即ち五拾五圓ドタ、五拾八圓ドタ、百圓は百圓大ドタと云ふ。

△ドテン　之れまでの賣玉を全部買戻す上に買越すか又は全部轉賣し更に賣越す事。

△解け合　相場劇變の爲め仲買人相互の約定履行困難の場合に或値段を

定めて差金受授し最初の賣買約定を解除するを云ふ。

△飛び臺　五拾圓〇五拾錢を飛び五拾錢と云ふ。

△ドンテン　正米の受渡しを爲す際倉庫から出した現米を受取方が倉庫に依托するを云ふ。

△同鞘　當、中、先、の相場が同じ事。

【ち】

△直取引　商品取引所では見本及格柄に付き株式では銘柄にて賣買當事者合意を以て賣買約定の當日より五日を越へざる期間内に受渡しを爲す事を約するもので轉賣又は買戻しを許さない賣買を云ふ。

△丁　米相場の一石に對しては壹錢の事、三十丁張りは米は十枚即ち百石を元とするが爲め一丁壹圓に當り十枚參拾圓を要するを云ふ。

△提灯連　大手筋の賣買方針に附和雷同して同じ方針を取るマバラ連中。

△ヂリ高

△ヂリ安　相場が少しづゝ高下すると云ふ。

△地場　仲買人其他專門の相場師を云ふ。

【り】

△利喰　定期賣買を行ひ現物の受渡をせず即ち轉賣、買戻の方法で賣り値と買値の差金を利得するを云ふ。

△利乘せ　相場の方向が利益ある方に向つた時其利金を敷金として玉數を增加するを云ふ。

△兩建て　例へば同一株の當月限りを一方に百株買ひ一方に又百株賣り

置いて値段を見て轉賣買戻をするか又は割の好い力を增加するの法で初めから行ふ者と後日危險と見て始める者もある。

【を】

△押目　相場騰貴の趨勢を有する場合一時下落した時を云ふ。

△追敷　追證據金の略語、始めに入れてある本證據金額の二分の一以上の金を相場變動の爲め賣買兩者の雙方不利となる一方から徵收する追加證據金なり追ひ證とも云ふ。

△親、親株　舊株の事新株に對して親と云ふ。

△大引　終りの立會を云ふ。

【か】

△買戻し、買埋め　賣つたけれども現物を引渡さずに之れを買付前に賣

つたのと相殺する事。

△買乘せ　買つたのが段々上つて利益となるに乘じ玉數を增加するを云ふ。

△瓦落（がら）　暴落を云ふ。

【さ】

△寄米筋　端數の小口米を蒐集し之を大口に纏め賣却するを業とする者を云ふ。

△寄付　取引の開始を云ふ。

△寄引　寄付と大引の連稱。

△呼び値　定期米では一石に對して相場を唱へ株式では一株に對して呼ぶ、國債地方債會社債券等では百圓を以てし、棉花に付ては百斤、木

綿は一丸(百反)綿糸四十玉(三百斤)に對する場合を云ふ。

【た】

△臺替り　相場の變物で五拾圓臺のものが六拾圓以上となる又四拾圓臺と替るを云ふ。

△盥廻し　同一人が甲店に買注文を發して乙店に賣注文を出し利喰を反覆する手段。

△建て米　米穀取引所で或特定の米を標準とし定期取引を受渡しの爲め提供された米と標準米との品位を比較し等差を設くるものなり之れの謂ひにして堂島は攝津中米、東京では武藏中米を用ふ。

△叩く　人爲的に相場を下落せんため賣るを云ふ。

【そ】

△相場附け商内　定見なく單に相場の形勢にのみ着目して其傾向に從ひて賣買駈け引きをする者で素人に此の類が多いそして失敗する。

△即敷　臨時證據金を全部損した其當日納むべき證據金で即とも云ふ。

△底　最安値を云ふ。

△底扱け　下落停止なき狀態を云ふ。

【つ】

△釣上げ　相場を人爲的に騰昂せしむるを云ふ。

△突込む　安い所を賣るを云ふ。

△繋ぎ商内　一方に買ひ一方に賣る、即ち前期を買つて後期を賣る事。

△附合せ　呑みの方法で仲買人が客の買ひと賣りとを組合せて自分で賣買した樣に組合せ取引所に出さぬを云ふ。

△繋ぎ物　期日に至り正株を渡す目的で賣る事。

【な】

△投げる　高値の買玉を持てる者が豫想に反し低落した時損をして轉賣する事。

△成行き賣買　相場の高低に關せず當日の賣買を仲買に注文する事。

△難秤　高低を平均しての賣買で買へば上る、又買ふ上る、又買ふ上る、何處までも行く之れを合せて平均を見て其の日の相場と見合せ平均以上になつて居れば賣れば差が儲かる、之れをなんぴん買と云ふ、賣る方でも同じ。

【ら】

△亂　子辰申の三日は平穩な場面を保たれず常に相場動搖すると言ひ傳へられて居る。

【う】

△賣崩し　下落せしむる目的で多數の賣を爲し下落させひそかに他に人を廻はし買ひ込み利を得る手段。

△賣乘せる　賣つた相場が下り利する時まだ下る見込みで得た金を證據金として其の上に賣玉を殖やして追ひかけ賣り進む事。

△賣透す　買持ちを漸次轉賣する事。

△賣解、賣埋め　前に買建てをしたが現品を取らずに賣付けを爲し前の買付けを相殺する事。

【の】

△乘り替へ　當限を仕舞ふと同時に中限又は先限で新規玉を建つる事例

へば買乗替の時は當限を轉賣し中限か先限かを買つて出る事賣乗替の時は當限を買ひ中か先を賣つて出る事。

△伸る　相場が順調に高くなるを云ふ。

△延引取　商品取引所では見本の銘柄及び現物に付き、株式では銘柄で賣買當事者の合意に依り契約の當日より百五十日を越へぬ期間内に受渡しを爲すと約し轉賣や買戻しを許さない取引を云ふ併し取引所の承認を得れば契約を解除する事が出來る。

【く】

△釘附け　相場が更に變動せざるを云ふ。

【や】

△厄日　重なる日は舊四月三日、舊五月三日、舊六月三日、六月節、土用入、土用三郎、土用五郎、二百十日、舊八月十日、二百二十日、等にして稻作に大影響を及ぼす。

【ま】

△マバラ　小額の注文客で此の中に本文にある一擧家を興さうとか云ふ類の人々が血の出る樣な金を持ち出し即ち一六勝負と同じ氣で始める者が変つて居るのである。

【け】

△競賣買　定期取引の賣買に行はるゝ方法で取引所では所定の順序に從ひ賣買物件の種類及び受渡期日又は期月を市場に掲示し一定の時刻に賣手買手を集合せしめ同時に競爭賣買を爲さしむるを云ふ。

【ふ】

△踏む　安値の賣玉を損勘定覺悟で高値で買ひ戻す事。

△懷（ふところ）　客に知らさぬ仲買自分の思惑。

△振ひ落し　所謂マバラ連、提灯連の客が多く買つた場合相場を下げて驚かせ投げさせる事。

【て】

△定期取引　直取引延取引に對し、豫め現物受渡の期限を定めおき賣買の契約を爲すをいふ、而して其の期限を三ヶ月以内とす一、一ヶ月の末に現物の受渡しを爲すものを當月限（又は當限、當）といひ二、二ヶ月目の末になすものを翌々月限（又先限、先）といふ。

△手張り　仲買人が自分の思惑玉を場に出す事。

△手仕舞　轉買買ひ戻しにより約定を決濟する事、仕舞ひとも云ふ。

△轉賣　以前の買約定の品を引取らずに賣つて買ひと相殺する事。

△出來高　賣買が出來た株數及米高の事。

△手筋　賣買者の系統を云ふ。

△天井　相場の高値頂上を云ふ。

△定期掛米　定期で渡さる可き米。

【あ】

△相對賣買　賣方と買方と一人づゝ相手に賣買する事。

△青田賣買　收穫前青田の儘約定する事。

△腮刺し　曲り屋の誰れかを知りたる時之れを困めんと殊更反對に煽り又は叩く事で提灯の反對。

△味　市場の景況にて値段の上下を想像するを云ふ。

△頭　相場の最頂上を云ふ。

△歩　値段の推移を云ふ。

△煽る　相場を變動せしめんために賣買するを云ふ。

【さ】

△鞘　鞘とは差額の轉化した語で價額と價額との比較上の差額で例へば三月限二十五圓、四月限二十六圓、五月限二十四圓十錢と云へば三月は四月より一圓高の差で、五月は三月より一圓十錢の差なり、鞘取り、鞘取り筋なぞ之れより起る、鞘取りは當中先の鞘を利用し安い方の限月に買ひ高い方の限月に賣る利殖法で之れは安全であるが五百六百の金では問題にならぬ。

△三期　當、中、先の三期の總稱なり。

【き】

△氣配　人氣を云ふ。

△氣崩　人氣の惡きを云ふ。

△氣直り　人氣の好くなるを云ふ。

△逆鞘　當が五十圓、中が五十一圓、先が五十二圓となるが順であるのに先が安い時を云ふ。

【め】

△目先　大局の形勢でなく眼前兩三日間位の狀況で之れに見て張るのを目先師、目先連とも云ふ。

△銘柄　物件の品名を云ふ。

【し】

△下放れ　相場が急に安値になるを云ふ。

△下押　相場の下落を云ふ。

△品攻め　賣方が買方に對して引渡すべき現株なきを見込み買方は強いて其引渡しを請求するを云ふ。

△主力株　思惑の燒點となる株で東株とか郵船株の樣なのを云ふ。

△新甫　毎月の發會に於ける先物相場を云ふ。

△實株繋ぎ　現物を所有する人々が其の現株を賣るを云ふ。

△正米師　現米賣買等。

【ひ】

△日歩　金錢を使用する對價として支拂ふ金額だが定期界では受渡しの

延期料の意に用ふ。

△引かれる　相場が豫測に反し自分の建玉が損分となりたる事、引れ買ひは損になつてるのに又更に買ふ事。

△開き　鞘に同し。

△引締り　相場の引締るを云ふ。

△日消　空相場の一種で前日の午後より當日の本場に至る間に爲した賣買を兩者の意志如何を問はず當日の前場迄の直段にて轉賣買戻しを爲したものと見做して決算する取引。

△彼岸底　從來彼岸時機の相場は通常天井(即ち上り止まり)か底かの何れかであると言ひ傳へてあるので彼岸の最低相場となつたのを云ふ之れに反すれば彼岸天井と云ふ。

【も】

△餅搗相場　米の收穫は通常十月十一月であるから十一、十二月の頃は市場に多くの米が出る一般賣りとなるが年末には安からうと思ふのが反つて高くなるので之れを云ふ、猿金泉錄に歌がある。

秋安く空腹上り一割半、霜月下り暮れ上るなり。

此の事實が現はるゝので呑屋仲買人は儲けが多いので餅が搗けて好い正月をすると云ふ意味。

△餅撒き　仲買人が市場で賣買を爲す時故意に割高く買ひ又割安に賣るを云ふ、一方は幾分づゝ利益を得る、そして仲買の方では例へば五十株の買注文を受けた時に十株又は二十株を割高く買ふ時は其殘玉即ち自分で呑んで居る分は割高に賣つた事となるから自分は餘計に儲けて

居るから餅撒きが出來るのである。

△保合（ももあひ）　相場の上下せぬ事。

【せ】

△糶賣買　商品取引所では現物見本銘柄及び數量（株式では物件の種類個數）並に直取引、延取引の期日を掲示して豫定の時刻に買手又は賣手に價額を糶糴らしめ糶賣りは最高價、糶買は最低價を付したのを確定の買主又は賣主とする賣買買法を云ふ。

【す】

△掬ひ　相場小往來の場合安値に買ひ高價に利喰する事小掬ひとも云ふ。

結論

古來投機事業の危險なる事は口に說かざるものはない、其れだけ投機に由つて身を亡ぼす者の如何に多いかゞ明るのである、そして之れに身を投ずる者の多くは「のる乎そる乎だ」の一語を以て出發する、此の一語は實に大なる死活二途の絕叫である、而して殆んど凡てが死である、問題は其の出發點に於て既に解決して居る事を忘れてはならぬ、終に臨み一言を加ふ。

取引所改善意見

既に反復數次說くが如く、取引所より起る弊害は取引所本來の目的とは反對の方向に脫出して只害毒をのみ殘す狀態となつて居る、之れは洋の東西を問はず取引所の存する所には此の惡弊が充滿して居る、故に各文明國に於ても常にこれが改善策に腐心して居る狀況である、況んや我國の如き後進國に於て一層然らざるを得ないのである、そこで各學者や經驗家が或は正面より論じ、或は裏面より、或は我田引水的に說く、故に其の理論と是非は何人も理解はするが、市場の實際と比較したならば、理論も法律もあつたものではない、人生の目的を只金錢にのみ置く利我的集合の活動はペスト菌の其れよりも甚だしいの

である、害毒は害毒とし議論は議論として一般參考の資としたいので
茲に兩家の意見の大要を摘記する事としたのである。

坂谷男爵の意見

賭博と投機との區別を明に決定せよ

△取引所賣買の本質　取引所法を論ずるに先だち第一に究む可きものは、取引所其の物の本質である、即ち取引所と市場の區別を明にせねばならぬ。英語のマーケットは何か、即ち多數の人が集合し此處にて何物かを賣買すれば是れ即市場である、併し之れのみでは取引所とは言へない。けれども之れを取引所に變更する事が出來る、其方法は市場に一定の習慣規則成立し、此習慣規則に依つて賣買取引するに至れば即ち取引所と云ふのである。此點は市場と取引所との區別に關する重な案件で

ある、換言せば市場は多數の人が集合して物品を賣買するの謂ひで其市場に一定の規則が成立して、或は法律を以て定められ、或は自然を以てするに至らば、茲に始めて取引所の成立を見るのである。

然るに取引所の賣買上に於て最も必要で而して最も世の誤解を生じ易きものは何か、即ち將來の見込賣買に關するものであらう。蓋し取引所の賣買は多く未來を見込みて行はるもので、例へば紡績會社の如く多額の原料を要する事業にありては市場で其原料を購入し製造の後に於て突然糸價が暴落した時は、其損害は多大である。幸に取引所があつて未來の取引をも約束し得るが故に紡績業者は現在と未來とを豫想して、原料も買ひ安心もして事業に從事する事が出來る、此場合取引所は恰も工業會社に對し原料定價の保險會社たる位置に立つのである、去れば將來の

見込賣買は商業上當然の事で毫も不正の手段ではない、にも關らず歐米諸國に於てすら將來の見込賣買を以て不正不道德の行爲と看做す者が多い、取引所に對する非難誤解も多くは此點より發生するので、取引所立法を誤る所以亦此に存するのである。

△株式取引と商品取引との區別　取引問題中、株式と他の物品との區別をせねばならぬ、此區別に三つの方法がある。

第一　株式取引は株式を所有せんとする意思に依り賣買が成立する。物品取引は物品を賣る爲の意思で賣買する、詳言すれば株式取引は資金を投じて株式を所有せんとするより行はれ、物品取引は物品を賣つて利益せんとするに行はる。是れ學術上に於ける區別で立法上第一に注意すべき點である。

第二　商品取引は商品其物の生産に季節がある、米、綿、小麥等のやうに。之に反し株式には季節がない、何時でも在る、此んな區別である。

第三　商品取引所に於ける商品は概して地方的の物。勿論或物は世界的性質を有するが多くは地方的に局限さるゝ、然るに株式は純然たる世界的の性質を有する、即ち紐育取引所に於ける株式が採算上有利で有れば紐育で其れを賣買し、或は伯林、倫敦、巴里等各有名な取引所で賣買する事が出來る。是れ資本に境界なしと云ふ經濟上の原則より來るのである、但し我國の取引所の如きは例外である。

故に株式と商品との取引所は全然別種の物とせねばならぬ、自分が茲に論述せんとするのは主して株式取引所の事である。

△投機と賭博との區別　取引所の取引は未來を賣り未來を買ふにあるが、茲に一つの疑問となるのは、所持せぬ物を賣る事は道理上果して正等か、又他に轉賣する意思で買ふのは果して不正でないか。と云ふ點にある。蓋し賭博と投機との區別は主として此處に存する、歐米諸國の法律を調査するに、賭博は多く禁遏する精神で制定されつゝある、然るに日本の取引所法では、賭博と投機の區別を明にせず立法の精神頗る曖昧である、試に現行取引所法を見よ、其取引方法に付き、定期、延、直などの種類を列擧せるも、取引所なる者を根本的に學理より論究し、斯の種の取引方法は法律を以て保護すべきもの、此種の方法は禁制せねばならぬと云ふが如き、明確判然たる區別は迚も發見する事は出來まい、是れ實に我取引所の一大缺點である、我國は既に馬券の賣買を賭博として

居る、苟も賭博類似の行爲なりとせば、取引方法は最も嚴重に之を禁遏せねばならぬ、蓋し何人と雖ども賭博を奬勵して國家國民の品位を向上せしめ得べしと信ずる者はない、賭博を以て合法行爲なりと認むる國は歐米には一つもない、或は一地境を限り、特に之を公行したる處は無いではないが例外である、道德論からも立法上からも賭博を禁ず可きは言ふまでない。

然らば賭博とは何かと云ふに、自ら所持せない物を賣るの可否又賣る目的で買ふ事の可否に就ては曾つて學者間に議論があつたが、今日多數學者の是認する所では、苟も取引所に上るものは買方は必ず其物品を引取るの意思を以てし、賣方は其物を渡すの意思でなくてはならぬ、此の意思があれば現在現物を所持せないでも未來に之れを賣る事を得べく、

又他に轉賣の目的で之れを買ふも、少しも賭博的行爲とはならぬ。之に反し單に未來相場の高低により僥倖せんとする行爲あらば即ち賭博である。此の區別は實際に於て容易に明る可きものではない、立法家は深く注意を加へねばならぬ。

△公正な相場表出の必要　取引所取引を確實公正とするには資力に富み經驗を積んだ者のみが賣買せねばならぬ。仲買人たると客たるとを問はず、取引所に出入する人は須く資力と經驗とを要す、然らざれば決して公正な相場を作る事は出來ない。各國の法律を調査するに資力と經驗に富まぬ者は取引所より排斥し去らんとするに力めて居る、如何にして排除すべきかと云ふに、賣買の單位を適度の高位に置く、例へば五十株又は百株と云ふやうにして薄資者をして手を觸るゝ能はざらしむるは其の

一つである。此は取引所立法の上に最も注意を要する點である。次に無經驗の者を排除する手段は、婦人の取引所に出入するを禁じ、未成年者の賣買を禁じ其他種々の方法あるべし、日本は如何に之れを定むるが可なる乎。

抑取引所の相場を公正ならしむるは立法の眼目である若し相場が不公正ならば爲めに受くる社會の損害は鮮少ならざる可し。故に取引所の公定相場表は極めて重要なもので之れが發表に就ては取引所は大なる特權を有するも不可なきものである。歐米に於ける相場表の發行は全く取引所の特權とし取引所は之に由つて相當の收入を得て居る。我國の如く各仲買店が勝手に相場表を發表し又は新聞紙に廣告する等の事は各種の弊害を伴へば宜しく相當の制裁を加ふるの必要がある。且つ取引の安全確

實を期し間接に經濟界に及ぼす惡影響を防止せんが爲には、賣買取引の對手たる者を制限するの必要起る可し、例へば仲買店の使用人が自ら客筋となり對手方となる事は弊害の爲め斷然禁せざる可らず。既に銀行支配人、書記の如きは客筋たる事を禁ぜられた所もある。余は今俄に可否を斷定せんとするのではないが、是等も立法上一顧を値するものたるや論なきを覺ゆ。現行取引所法は定期と云ひ直と云ひ單に其取引方法の解釋に過ぎずして、上述の如き肝要の點に就ては何等規定する處がない。

△取引所の組織問題　に就ては會員組織と株式組織との可否であるが、現行法は二者共に認めて居る、歐米にても又會員組織と法人組織の二種がある、皆其國々の習慣歴史により馴致せる制度なれば其可否は容易に斷言し得ない、假に株式組織を會員組織に改めんとせば、現在株式組織

取引所の株主をして成る可く損失を蒙らしめぬ手段を廻らさねばならぬ、併し容易の業ではない、と云ふは既に株式組織年來の慣習惰勢あるにより、新たにするは極めて面倒なる事情の羹縁する事があるからである。紐育の取引所は右二者の外にカーヴと稱する露店の取引所も在る。ウォール街の株式取引所會員は其人數一千一百人であるが其中六百十人餘は紐育に於ける屈指の金融業者である、何故に斯る大銀行家の多數が會員となり居るかと云ふに、取引手數料が會員相互間に於て特に低廉であるによる、されば此の會員の資格を得るには實に八萬弗の巨額を要するも此便利の爲め大銀行家は多くは會員となりつゝある、日本にても大銀行家が取引の仲買人たる事は奬勵すべき事と信ずる、蓋し仲買人の資力を增大するに非れば、會員組織は好成績を擧ぐ事は出來ない。

現在取引所の改善方法

取引所法の改善に關しては、現在に於ける株式取引の如き長き定期の必要は無からうと思ふが、併し取引の方法は法律を以て干渉するよりも成る可く習慣に任じた方が好いかと思ふ、只賭博と投機との區別を明に法定すれば其他の取引方法は之れを取引所の自治に委して可なりと信ずる。

次に現在の取引所は多きに失するの嫌ひがある、歐米の例に徴しても我國の取引所は過多である。其數を減じ更に税を輕減せねばならぬ、元來賣買取引に課税するは其取引を制限する譯で經濟の道理に合せぬ處置である、例へば魚の取引に課税すれば其税は商人より更に消費者に廻は

り經濟社會上復雜な關係を生ず。又仲買人の資格を改善するは必要なるも既に許可した仲買人の權利を擅まゝに强奪せんとするは宜しからず、只若し有力なる銀行家をして仲買人たらしむるを得ば此目的を達するに大なる便宜を得べし。云々（文責在記者）

天野法學博士の意見

金融上必要なる本能を發揮せざる無用の長物なり

取引所の改善に就いては明治三十二年頃よりの議論であつて今日に至るも尙ほ依然として論議しつゝある、自分の考ふる處では、日本現在の取引所は畢竟本來の目的を達して居ない、世人の所謂一種公開の賭博場に過ぎずと云ふが如き批難攻擊を受けても殆んど答辯の餘地だにない狀況にある。

試みに外國の取引所を見るに、取引所に於て差金取引の行はるゝのは

日本と同じく、一種の空相場の如きものも盛んに行はれては居るが、之れと同時に實際商品の賣買を望めば、幾何にても取引所に於て之れを行ひ得べく且つ如何に巨額の物價でも自由に取引する事を得る、即ち實地商品取引の中樞機關たる能力は極めて發達して居る。

之れに反して日本の取引所では少しく纏つた金高となれば賣るにも買人なく、買ふにも賣人がない、已むを得ず取引所以外で賣買する有樣である。米を深川に賣買し、公債を現物商人の許に賣買する外なきが如き極めて不便な事實を有する、即ち取引所本來の目的と相遠ざかる事甚だしい、加之反つて徒に國民の射倖心、或は投機心を助長せしむるの結果を生ずるに過ぎない。例へば少額の外資輸入があれば忽ち金利が低落し有價證劵の價格は昂騰し、財界の平和を攪亂するに至る有樣ではないか、

折角輸入した外資は未だ國家の完全な資本とならない前に、早くも投機の資本となつて了ふのである。之れを譬へて曰へば「取引所とは恰も雜草繁茂せる荒原の如き者なり」此雜草を芟除せざれば焉んぞ米麥の繁殖が望まれやう、假必要とす、若し雜草を芟除して麥を植ゑ稻を植うるをりに外資の輸入ありとするも、若し適當な雜草芟除者がなければ却つて空相場を盛ならしめ經濟界を攪亂するの意義である。

此故に才氣ある者は相場師たらん事を求め、金ある者は皆之れに手を着けんとし、延いて所謂射倖心、投機心を煽るに至るのである、尤も之れ等の精神は必しも咎を取引所制度の不完全のみに歸すべきではない、一は輕浮なる國民性に關係する處が尠なくない、が併し其有力な原因は此の制度の不備にある事は爭ふ可らざる事實ではあるまいか。但し投機

心の強弱に就いては獨り我國民のみ然りと云ふのではない、寧ろ外國人に其の強烈なるを見るが、事實の上に於て之れを見れば、零細の金錢と雖ども手に有れば直ちに無謀の投機に使用すると云ふ點に於て、我國民の投機熱が甚だ強盛であると言はねばならぬ。之れ畢竟取引所制度の不完全なるの致す所である。將來外資輸入など起らない以前に須らく改革し置かねばならぬ。

以上は十餘年前に於ける自分の論旨であつたが、十餘年後の今日に及んでも尙ほ此の論旨を變ずるの要を認めない。

然らば如何に改革すべき乎、如何にせば是等の弊害を防ぎ得べき乎、と云ふに、會員組織を以てするを第一とする。會員組織として仲買人の自治制度と爲す事、之れ即ち最良の方案である。今日の如く仲買人以外

に取引所ありて家を貸し計算を爲し擔保を爲すが如き干渉的態度に出づるは、世界何れの國にも類例なき所の一のシステムである、況んや此の制度が容易ならざる各種の弊害を生むに於て注意を拂はねばならぬ。仲買人の信用は債務の保證者たる取引所の爲めに失はれ、敢て其人格如何を問ふ事能はざるに至り、又其結果として、定期取引の期限も無限的狀態となる。詳言すれば確實な取引所が其の責めを負ふが爲めに、極めて長い期限中に仲買が倒產し若くは客が倒潰する事があつても何等顧慮する所なく期限は徒らに延長して、其間に賭博の餘地を惹起するに至る、若し之れを仲買人の自治制にすれば、名譽あり信用ある仲買人に非れば、世人の之を對手とする者あらざる可く、恰も英國に於けるローヤルエキスチエンジの如く、財產と人格と、共に極めて優良なる者たるに至るで